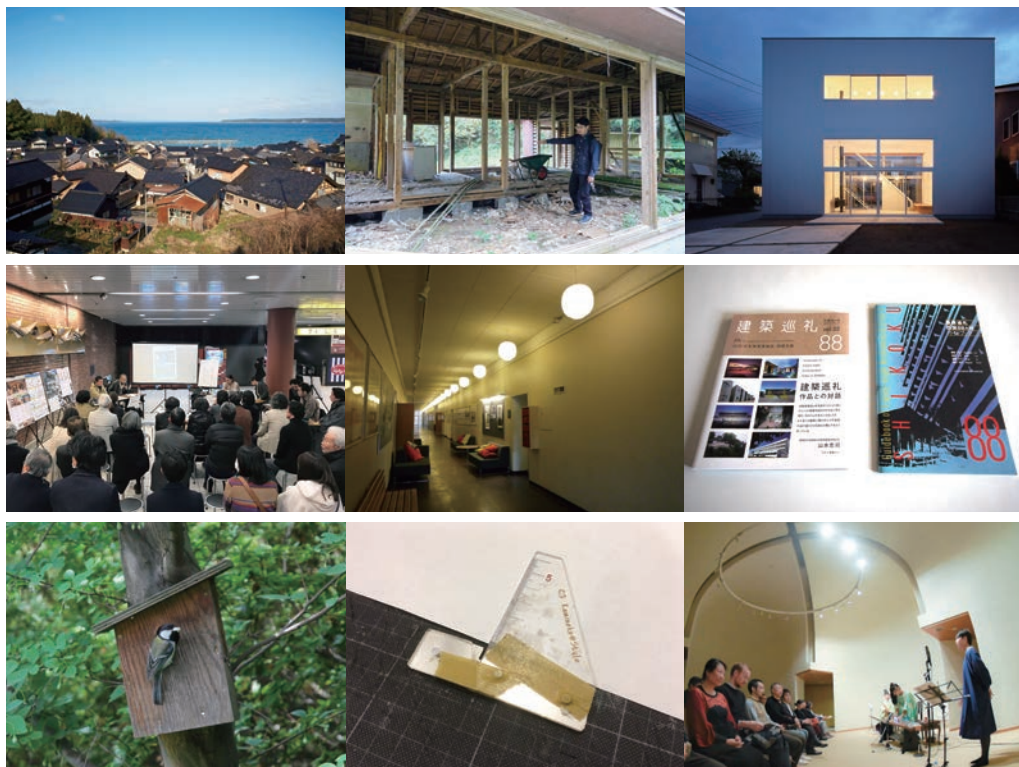


Bulletin 279

2019 春号



COLONNADE

特集：建築を通して何ができるか「ローカルで仕事をする」
第30回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2019／四国支部

FORUM

改めて登録建築家を考える／海外レポート／覗いてみました他人の流儀／温故知新
活動報告／日本版CABEを考える／わたしの愛用ツール



人にも環境にもやさしい 安全な防水材と緑化資材を製造・販売

大日化成株式会社は、建築用シーリング材の製造・販売会社として1973年に大阪で設立しました。それから、約45年にわたり建築・土木分野の製品を開発・販売しています。主力商品は、屋上やベランダ、排水槽や浄水施設等で使用されるポリマーセメント系塗膜防水材の「BIG SUN(ビッグサン)」。

安全・安心な“水系”防水材を

当社は、40年近く前から「安全・安心」を掲げ、使う人、生産する人の安全と、環境に優しい製品づくりを目指しています。取り扱い防水材は、従来の有機溶剤系ではなく特定化学物質を含まない水系にこだわり、安全で施工性に優れたものを開発しています。

1980年に発売したエマルジョンを主成分とするポリマーセメント系複合防水材「BIG SUN」は、臭気や有害性を低減した環境に優しい塗膜防水材です。アスファルト防水、ウレタン防水、シート防水の上にも塗布できるため、当初は改修材として使っていましたが、最近は新築の現場の地下防水なども増えてきました。現在建設中のオリンピック関連施設の地下にも使われています。

「BIG SUN」にはさまざまな工法があり、施工場所に応じて防水層を形成します。「FP工法」はOAフロア用で、火災でスプリンクラーが作動しても、これを床面に塗布していることにより下の階への漏水を防ぎ、コンピューターなどを水から守ります。さらに、水平燃焼試験(UL94HB)にも適合していて燃え広がりにくく、火が付いても煙の出ない工法になっています。

タイル張り面に最適な 透明で伸びる壁面防水材

外壁用防水材「スカイコートW」は、透明な塗膜で、打ち放しコンクリートやタイル張り面の風合いをそのまま残



東京駅丸の内駅舎の地下外壁の壁面などにも防水材「BIG SUN」が使われています

して雨水の浸入を防ぎます。この商品の大きな特長は、1液水性の特殊ウレタン樹脂が主成分なので、とにかく強度が高くてよく伸びること。目地補修とは違い壁面全体に塗るのですが、経年変化等によってタイルにひび割れが起きても防水材は伸びてクラックが入りにくい特性をもっています。また密着性が悪いタイル地にも強固に密着し、タイルの剥落予防にもなります。耐久性に優れていて変色もしないため、新築、改修、どちらにも適しています。

この「スカイコートW」を歴史的建物の保存に使用するため、現在テストを行っているプロジェクトもあります。

簡単なワンタッチ施工で 屋上やバルコニーを緑化

都市部のヒートアイランド現象の緩和に寄与するため、緑化システムも販

売しています。屋上緑化システム「ベジルーフ・ユニット・システム500(VUS 500)」は、ユニット式で専用の固定金具で取り付けだけの簡単施工。風速70メートルでも飛ぶことはなく、アスファルト防水をした上にも設置することができます。

ひとつのユニットに乾燥に強いセダム植物を数種類混ぜることで、すべてが枯れてしまうことはなく、その環境に合った強い植物だけが生き残るように考えました。灌水装置を付ければメンテナンスも最小限で大丈夫です。屋根の表面温度を下げる遮熱効果も実証されていて、室内温度の抑止にも貢献します。他にも、ツル植物を使った壁面緑化システムも取り扱っています。

これからも自社の技術を活かして、地球環境に配慮した安全な商品の研究・開発を続けてまいります。



<https://www.dainichikasei.co.jp/>

屋上やベランダ、屋根等の建築物用と、水槽や地下外壁、浄水処理施設等の土木用防水材を販売。他にも、上水道下水道施設用のコンクリート防食材や、緑化資材も取り扱っています。

■本社 大阪府門真市末広町8-13 TEL: 06-6909-6755 FAX: 06-6909-6702
■東京支店 東京都港区芝大門1-4-14 TEL: 03-3436-3801 FAX: 03-3436-3803

CONTENTS

COLONNADE

- 4 特集：建築を通して何ができるか「ローカルで仕事をする」
- 5 石川県 能登の風景と暮らす 能登デザイン室 奈良雄一
- 6 群馬県 住宅の公共化 一戸建て住宅はどこまで開けるのかー 小島光晴建築設計事務所 小島光晴
- 7 山梨県 建築の達成感を感じて SHOEI一級建築士事務所 大原 正
- 8 北海道 制約がアイデアの起爆剤に TRYOUT 中村 領
- 9 大分県 地方における建築家のアップデートを
ー建築家は地方の未来を変えることができる、トップランナーであると考えー
九州アイランドワーク 馬渡佑佑
- 10 鹿児島県 しま・ひと・たから
ーふるさと奄美大島の空き家から、次の時代につなげるプロジェクトー アトリエ・天工人 山下保博
- 11 温故知新 抱負を語る 将来を決定付けた出会い Atta一級建築士事務所 アトリエta 依周次郎
抱負を語る 古いものから学ぶ デザイン+α 一級建築士事務所カワサキジムショ カワサキ ユウスケ
- 12 第30回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2019
今、サステナビリティを考える 関東学院大学／コンテンツボラリーズ 柳澤 潤
- 18 四国支部 四国88カ所 建築巡礼について 環境デザインワークス 清水裕旦

FORUM

- 20 連載：改めて登録建築家を考える 第3回 実務訓練制度のあるべき姿と実施状況 近藤総合計画事務所 近藤 昇
ASCO.partners 安達治雄
内野設計 内野輝明
- 22 海外レポート デンマークあかり紀行 ー照明デザイナーの視点ー チップス 永島和弘
- 24 覗いてみました他人の流儀 行川さをり氏に聞く 空間をつくるように自分の音楽を表現したい Bulletin編集 WG
- 26 温故知新 『ライトの遺言』 椎名英三祐子建築設計 椎名英三
- 27 活動報告 交流委員会Cグループ 建物見学会「長崎」報告 ニットー 日東英成
- 28 交流委員会Eグループ JIAの活動に参加して 中電工 石津浩章
- 29 日本版CABEを考える キーワードで繋がるコミュニティ ー「えねこや」の活動を通して感じることー
アトリエ六曜舎 湯浅 剛
- 30 わたしの愛用ツール ネットストラップ型ペン差し／カミネコ／消しゴム

BACKYARD

- 31 コラム 小さな生の営み 益子アトリエ 益子義弘
- 31 編集後記

- 2 パートナーズアイ 大日化成株式会社 人にも環境にもやさしい 安全な防水材と緑化資材を製造・販売

(「連載：建築写真について」は、今号は休載いたします)

ローカルで仕事をする

はじめに

『Bulletin』巻頭の特集では、これまで比較的大きなイベントを中心に紹介してきましたが、特に活動の活発な地域を取りあげることが多く、東京や神奈川など都市部の情報に偏りがちでした。

JIA 関東甲信越支部は、関東地域である1都6県以外にも、山梨県、長野県、新潟県まで一体となる巨大な支部です。都市部には都市部の活動や仕事や考え方があるように、地方には地方ならではの何かがあるのではないかと、密集して競合しているエリアとは異なる地域との関わり方や問題などがあるのではないかと。今回はそんな視点から、地方を「ローカル」と仮定してスポットを当て、関東甲信越支部のエリアに限らず、全国のローカルで仕事をする6人を紹介します。

地方を拠点に活動している方、都市部から地方のことを考えて取り組んでいる方、それぞれの立場や状況によってさまざまな地方との向き合い方があるでしょう。また、地方では人との繋がりが醍醐味のひとつだと思います。一方、都市部でも下町や密集地など人と人との繋がりが密接な場所もあり、その小さなコミュニティも「ローカル」と定義できるのではないのでしょうか。

この記事を通して、皆さん自身のいる場所やポジションを改めて見つめ直し、地域と建築を考えるとともに、これから皆さんが建築を通して何ができるのかを考えていただくきっかけになればと思います。

(『Bulletin』編集長 長澤徹)

●今号の「温故知新（抱負を語る）」は、地方で仕事をされているお2人に執筆していただきました。この特集ページに続いて紹介します。



映画『男はつらいよ』の撮影に使われた家屋を改修した伝泊「リリーの家」(加計呂麻島) (p.10 山下保博さんの文章より)

能登の風景と暮らす

1977年東京都生まれ。1999年横浜国立大学建設学科卒業。2000年渡伊。ヴェネツィアでガラス工房、建築事務所勤務を経てデザイン活動始める。2006年ヴェネツィア建築大学卒業。旅行で訪れた能登の自然と生活の豊かさに触れて帰国を決意。能登島に移住する。2007年能登デザイン室を設立。

能登デザイン室
奈良雄一



日本海に突き出る石川県の能登半島に抱かれた、内海七尾湾に浮かぶ能登島という周囲70キロほどの島で、能登デザイン室は建築設計とデザインの業務を行っています。私は2006年、それまで7年間過ごしたイタリアのヴェネツィアから、2011年には世界農業遺産にも認定される豊かな自然環境と伝統的な生活文化が残る能登に魅せられ移住してきました。移住してすぐデザイン事務所を開設し、地域の素材や伝統技術、一次産業の地域資源を活かすべく、グラフィックデザインとプロダクトデザインの仕事を開始しました。5年後、自宅の設計を機に建築設計の仕事も始めました。住宅の設計においても能登の素材と技術を最大限活かしつつ、自然環境に即し能登の風景に馴染む、ここでの暮らしにあった家を作るべきではないかという思いを漠然と持っていました。

自宅は能登半島と能登島が一望できる高台の土地を求め、それまで知らなかったさまざまな地元の素材をリサーチし、それらを扱う経験豊かな職工と協力して設計施工を行いました。能登の素材で代表的なものに「アテ」と呼ばれる地元の木材があります。赤身の割合が多く、非常に香りの良い木で、冬でも湿気が多い北陸の気候の中でも腐りにくく、シロアリも喰わないということで、昔から水まわりや下回りの材に使われてきました。半面、乾燥による捻れが大きく、加工の経験がないと非常に扱いづらい材料といわれています。輪島にある製材所で天然乾燥したアテ材を使い、墨付けと刻みを独自で行うことのできる地元の大工棟梁に依頼し、伝統構法で建てました。

能登の伝統的な民家が立ち並ぶ集落の景観は、厳しい風雪に耐えるようたつぷりと黒い釉薬を塗って焼き上げられた“能登瓦”を載せた屋根と、潮風を受け色が抜けてグレーになったアテの下見板張りの外壁が特徴で、モノトーンの民家群が四季折々、周囲の自然の景色にすっぽりと収まっている様はとても美しく印象的です。その景色の一部になれるようにと、建物の外装素材はそれらに合わせ能登瓦とアテの下見板張りとししました。その他にも手漉き和紙、珪藻土、漆、稲藁等の地元の自然素材。左官、家具、建具、薪ストーブ等の職人の技術を取り入

れ、開口部による空間的な繋がりだけでなく、触感等の肌感覚的にも能登の自然をなるべく感じられるような内部空間を目指しました。給湯用の熱源も、自伐する薪や竹を利用して沸かす薪ボイラーを導入したり、耕作放棄地の田んぼを借りて稲作を行ったりと、生活者としてはエネルギーや食料の面でもなるべく自給できるような暮らしを実践しています。

ここ能登で生活をしながら建築の設計をするということは何かを考えると、ひとつの構法、ひとつの仕上げ材料を選ぶ際にも、機能性や施工性やコスト以外に、自分が今まさに身をおく周囲の自然環境の中にあり、景色として日々見ているものを素材として扱うことができるということが挙げられます。都会で暮らし、都会のオフィスでカタログやネットの情報を見て素材を選ぶのとは非常に大きな違いだと感じています。窓から見える山に生えるアテやスギの木、海に侵食された岩肌に見える珪藻土の地層、季節ごとに移り変わる山や田畑の色合い、そこから採った素材で形づくられる集落とその周囲の風景。それらは当たり前ですが、その土地で人が生活することによってこれまで維持されてきた風景です。その風景に惹かれて移住し、その中で暮らす一生活者となった今、改めてその風景が今日まで残ってきたことに日々感銘を受けます。同時にその風景が今後も残っていくのかということに不安を感じつつも、建築という括りにとらわれず、地域の人々とできることを考え、実践していくことにやりがいと手応えを感じています。



能登デザイン室がある能登島曲町(のとうまががりまち)の家並み

住宅の公共化

—戸建て住宅はどこまで開けるのか—

1973年栃木県生まれ。1996年工学院大学工学部建築学科卒業。1998年工学院大学大学院修士課程建築学修了。1998年山本・堀アーキテクツに入所。2001年群馬県でStudioGreenBlue一級建築士事務所を設立。2013年事務所名を小島光晴建築設計事務所に改称。2013年～工学院大学建築学部非常勤講師。

小島光晴建築設計事務所
小島光晴



私の拠点がある地域の住宅は、敷地を塀で囲むなど、プライバシーを重視する住宅が多い。敷地に余裕がある地方であっても周囲を気にする佇まいなのである。

また、地方にいと、高齢化をひしひしと感じる。内閣府発表の高齢社会白書によると、65歳以上の者がいる世帯数の構成割合は、単独世帯が3割弱で、夫婦のみの世帯は3割強。つまり、一人暮らし、およびその可能性のある者は、6割程度いることになる。それに加え、孤独死の不安を感じている人も多いようだ。テレビアニメのサザエさんのように同居し、家族で見守るという状況は今後も期待しにくいだろう。そういった現状を踏まえた時、プライバシー重視の価値観で設計することに疑問を感じる。これからの住宅には何ができるのだろうか。

以前、住宅街に夫婦と子供3人の住宅を設計した。この住宅の中央にはガラス張りの土間がある。それを立体的に包むように他の部屋を配置した。各部屋はこの土間を介して、他の部屋と繋がる動線計画とした。土間は1階面積の1/2とし、南北の庭との繋がりを強めた。敷地には、新たな塀は設けず、道路側見附の3/4を開放し、段差も極力なくし、気軽に入れる公開空地のようにした。そこは敷地の75%を占め、畑、芝、テラス、薪置場、駐車場などを配置し、ボール遊びやBBQ、農作業、薪割り、芝刈り、洗車など、外での滞在時間が長くなるように企てた。その庭と一体の土間は、使い慣れたテーブルと椅子を置き、勉強や読書、家事作業や薪ストーブなどで料理したものを食べたり、人をもてなしたりと、特定の用途がない場所とした。

住み始めてから2年が過ぎたが、この土間は、家族が一番集まる場所になったという。住宅街でオープンにすることに少し抵抗を感じ、ロールスクリーンも設置したが、プライバシーを気にして閉めることはほとんどないそうだ。他にリビングなどもあるのだが、それでも滞在時間が長いのはこの土間だと話す。もしかするとプライバシー重視の価値観は、暮らす前の家族と設計者の不安がつくる価値観なのかもしれない。

このように公共性の高い開かれた場所で過ごしている

と、道を行き来する人と、あいさつや会釈から自然に交流が始まっていくようだ。面白いのは、家族が土間に戻ると、近所の人が回覧板や野菜のお裾分けを持って来てくれることだ。これは地域と向き合っているからこそそのタイミングである。近隣住人は、気軽に立ち寄って良いと感じ取っているのだろう。

昔の人から「隣から醤油を借りたものだ」と逸話のような話を聞くが、交流しながら歳を重ねていくとあり得る話だと思う。ノスタルジックな話がしたいのではなく、住宅を開いたからこそ地域と繋がり、将来二人になった時、そして一人になった時、頼りにできる心強い繋がりを得られているのではないか、と思えるのだ。

社会が大きく変わったのだから、住宅も変わる必要がある。家族の枠を超え、地域との交流を促せる、みんなで見守る新しい枠組みに可能性を感じる。それは「楽しみをシェアできる明るい環境」でありたい。



家族が集まり、近所の人も訪れる土間

(写真：Mitsuharu Kojima)



公開空地のような繋がりを持たせた敷地

(写真：Kai Nakamura)

建築の達成感を感じて

1966年山梨県甲府市生まれ。1990年東京理科大学理工学部建築学科卒業。1992年東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。1992年竹中工務店設計部入社。2002年勝米建設一級建築士事務所 大原建築研究室 室長。2007年～山梨県立甲府工業高校建築科非常勤講師。2013年SHOEI一級建築士事務所に改名。

SHOEI 一級建築士事務所
大原 正



今から16年前の36歳の時に、10年間勤務したゼネコンの設計部を退社し、地元の山梨にUターンしました。

以前勤務していたのは、オフィスビルやドームなどを手掛ける設計施工の会社でした。他社と大きく違うのは、入社後1年間、約300人の新入社員が共同生活をするため強い絆が生まれ、その後全国どこへ行っても必ず同期に会えて、仕事のフォローをし合える関係を築くことができること。また、現場の都合で変更するのではなく、良いアイデアをどうやったら実現できるかを皆で一緒に考えていき、会社全体で良いものをつくっていくという意識を社員が持っていることです。この10年間で学んだことは、その後の自分の仕事の礎となっています。

常に企業が相手の仕事だったので、エンドユーザーに接する機会が少なく、自分たちの仕事に満足してくれているのだろうかという疑問を感じるようになってきた入社9年目頃、私の実家に話のあった住宅の設計を依頼されました。家業は土木中心の建設会社でしたし、自分自身はバブルのはじけていましたが相変わらず忙しく、深夜残業は当たり前だったので、少々不安を抱えながらのスタートとなりました。また、それまでRCやS造の経験しかなかったので、木造や個人住宅に関してはゼロから勉強する日々でした。しかし、住宅の内外のシーン、機能、性能、使い勝手、さまざまな素材などを自分で決め、施主に提案し、コスト、工期など細部まで把握しながら進めていく仕事はとても楽しいものでした。寝る時間も惜しんで、本屋や図書館に通い、電車の中で図面を描き、週末にはあずさに乗って帰郷し、施主との打ち合わせや現場を確認に行く。今では信じられない仕事の仕方をしていましたが、施主と話をしながらモノづくりができるという喜びは何にも代えがたいものがあり、建物が完成した時に「最初から最後までまとめてくれたので安心して任せることができたし、何より想像以上のものができた。本当にありがとう！」と言っていたあの時の感動は今でも忘れられません。人生をこの仕事にかけたら幸せだろうなと思い、思い切って退社しました。規模は違いますが信念は同じく、全員が良いものをつくっ

ていこうと思える環境づくりからやってみよう！と、山梨に帰って家業の中で建築の設計施工を始めました。

山梨に戻り、少しして工業高校の非常勤講師をすることになりました。山梨県には建築を学べる大学がないため、建築に興味がある若者と接する良い機会と考え、設計製図の授業を担当することになりました。今年で12年目になります。毎年2年生の進級課題を担当しており、テーマは高校生なので身近でわかりやすい「住宅」とも考えましたが、建築のおもしろさを若いうちから感じてもらいたいと考え、実在する建物で彼らが過去に体験したことがある施設を探し、その建替えを題材にすることにしました。約半年で模型まで完成させなければならぬので、高校生にとっては難関です。しかしこの高校は、建築甲子園などでも優勝経験があり、部活も盛んで皆根性があり、今まで提出できなかった生徒は1人もいませんし、自分が設計した建物の模型を完成させたときに、「実際に建物をつくったような感覚を味わえて忘れられない思い出になりました。この達成感忘れません！」という生徒の言葉を聞いて、私も元気をもらっています。

施主とコミュニケーションをとりながら、喜びを分かち合い、全員で良いものをつくろう！という意識を忘れずに、そして建築の達成感を楽しみながら、これからも頑張っていきたいと思います。



上：高校生の作品模型
左：設計した山梨の住宅

制約がアイデアの起爆剤に

企業支援家／ローカルビジネスプランナー 1977年北海道札幌市生まれ。2001年東京理科大学理工学部経営工学科卒業。2013年に㈱TRYOUTを設立。現在北海道を拠点として、年間200件ほどの経営改善・新規事業創出支援を行う。中小企業診断士。http://try-out.jp

企業支援家／
ローカルビジネスプランナー
TRYOUT
中村 領



学生時代には建築家を目指そうと思った時期もありましたが、結局は別の道に進みました。ただ、「目的」を具体化する「設計」という作業が好きで、現在は有形無形問わず、事業そのものを設計することが、自分の仕事のひとつになっています。現在は北海道に拠点を置き、道内各地を走り回りながら、地方のビジネス環境に合わせて中小企業の経営改善、新規ビジネスの創出などをサポートしています。関わる業種・業態や規模はさまざまですが、平均して年間200件ほどの案件に関わり、事業構想から計画づくり、そして資金調達などに関与して事業の実現をサポートしています。

地方における企業支援は、まちづくりとも大きく関わっています。集落が持つ問題や、集落に求められる機能(△△屋がない、××ができない)と、事業化の可能性が密接に関係しています。そのため、各地で開催されるその地域持続に向けた住民の暮らし方を検討する協議会などにも積極的に参画、行政・金融機関・地域NPOなどととも、将来に向けた議論を重ねています。

地方では至る所で空き家が散見されますが、ここ数ヵ月で私が事業計画の作成や資金調達を支援した事例は、いずれも空き家の活用を事業化したものでした。

1つ目の事例は介護施設です。いわゆる古民家の「家」としての佇まいをそのまま残し、家事や庭の手入れ、畑作業など日常生活活動を行うデイサービス施設は、あえてバリアフリーにしないことで自宅での生活を想定した訓練が実施できます。また、この地域は住民の連帯感が特に強く、町内会活動なども盛んなため、地域のコミュニティ拠点としてだれもが集うことのできる「共生型地域福祉拠点」の役割を担い、介護報酬以外の収益の獲得を目指しています。空き家の改修費用はオーナーが負担し、事業者がオーナーに月額賃借料を支払う仕組みです。

2つ目の事例はテイクアウト専門のジュース店です。築100年近い店舗兼住宅を改装し、北海道ならではの米こうじを使ったジュース専門店として、自家製のこうじを用いた甘酒などのドリンクを提供します。周辺の観光地や駅・空港などとの立地のバランスを考え、滞在型の

飲食店ではなくテイクアウト専門の店舗としました。空き店舗を相続し、解体処分を検討していたオーナーと、起業を目指す方のマッチングが成立。店舗物件の無償贈与を受け、開店に至ることとなりました。

3つ目の事例は弁当店です。栄養士の資格を持つ店主が、生まれ育った地域のおいしい食材をもっと活かしたいという思いから、弁当店をオープンしました。地域には店舗が少なく、多くはスーパーやコンビニで昼食を済ます食生活でしたが、そこに新たな選択肢を提供しました。当初は店舗での販売を検討していましたが、昼には自宅に戻って昼食をとる人が多いという地域性を踏まえ、自宅や役場・主要施設への配達専門に事業内容を切り替えました。店舗は古商店を改装して厨房機能に特化、月額1万円という格安の条件で賃貸借契約を結んでいます。

こうした事例は、いずれも人口数千人規模の地方部で起きています。地方では市場規模が小さく、都市圏で行われているビジネスをそのまま持ってきても成立しないことがほとんどです。しかしこのように地域特性や強みを活かし、地域内・外の商圈を巻き込んで成立するようにアレンジすることで、小さくても持続する事業の実現を目指しています。

地方にたくさん眠る、資産価値のない「負動産」と言われるようなものも、事例のように見方を変えることでまだまだ活用の余地があります。チャレンジをしたい人と、物件オーナーを結びつけるマッチングの仕組みを整えば、さらなる利活用が進む可能性が残されています。

地方というのは一見制約条件が多い環境のように見えますが、私の場合、制約がアイデアの起爆剤となっています。これからたくさんの挑戦者からエネルギーをもらいながら、そこでしかできない事業を、ひとつでも多く送り出すお手伝いできればと思っています。



(左) 国道に面する旧商店。
(右) テイクアウト専門のジュース店へ改装、開店準備を進めている。

地方における建築家のアップデートを

—建築家は地方の未来を変えることができる、トップランナーであると考え—

1982年宮崎県生まれ。佐賀大学理工学部都市工学科卒業。ITベンチャー、コンサル会社を経てチームラボに入社。「学ぶ！未来の遊園地」の事業立ち上げに従事し、2015年に大分県竹田市に移住。現在は、九州アイランドワークの立ち上げを行っている。

九州アイランドワーク
馬渡侑佑



大分に移住して手がけているプロジェクト

東京から大分に移住して4年目に入ります。私は、移住する約3年前からチームラボキッズという会社で、子どもたちに向けた、デジタルアートの展示を行う事業の立ち上げを行ってきました。新しいコンテンツを取り扱う仕事だったため、自分たちが作り上げるコンテンツについて、「クオリティ」や「世の中のニーズに合っているのか」「どのようにこのコンテンツを世の中に伝えるか」を常に考え、それを実験観察してきました。

そして今、私は、大分県で空き家を改修し、宿泊施設や商業空間、コワーキングなどを展開するプロジェクトを行っています。このプロジェクトチームの中に面白い3人の建築家がいるのです。

その3人はいずれも開拓者で、設計だけではなくデベロッパーのように、地方の空き家や遊休施設に「用途」を吹き込んだり、設計業務と事業者の新しい関係性を構築する取り組みを行っています。この3人のような建築家の働き方が、地方での新しい建築家としての働き方になるのではないかと考えます。

100均化する建物と空き家が地方景観になってしまう

大都市の景観は、デベロッパーと投資マネーによる都市開発によって作られていくと思います。地方の街では、地域経済に合った建物とその地域の伝統、生業、自然によって景観がつくられています。その景観が、その街のアイデンティティ、キャラクター性を形成し、特徴的な

ものを生んでいます。

私の住む竹田市は、特に街のアイデンティティやキャラクター性が感じられる街です。ただ、現状、小さな街の地域経済は悪化の一途をたどっています。そのため、建物は100均化して安く建てられ、人口減少により空き家が増えて、どんどん悲しい景観が生まれています。さらに生業が減って街の伝統がなくなると、街のアイデンティティやキャラクター性もなくなってしまいます。

建築家の1割が小さな業態変化を受け入れたら

私たちのプロジェクトでは、チームに建築家が入ることにより、これまでのような「設計をしてお金をもらう仕組み」ではなく、「設計したものがお金を生み、それによって収益を稼ぐという仕組み」で行うことができます。建築家としてはリスクがある業態変化だと思います。ただ、地域経済が縮小しているなか、潤沢ではない予算のなかで、事業を始めるに当たり空間設計のプロがプロジェクトのチームに加わってくれることは、事業者としては大変メリットがあり、事業がうまくいく、ひとつのピースになります。

地方に新しい建築物が生まれることが、好循環を生む

地方経済が長期間下がり続けることで、建築物への設備投資は少なくなり老化が進み、それによりさらに経済が悪くなるようなスパイラルから脱却するには、前述した100均化した建築物ではなく、建築家と一緒に作る新しい建築物（リノベーションした建築物）と新しい事業がどんどん生まれることが必須です。その両方を、建築家を含むチームで実現していくことが、まちづくりのひとつの方法論となるのではないのでしょうか。私たちはまだまだ事業としては途中の段階ですが、チームに建築家がいることの重要性は実感できています。全国的にもまちづくりに建築家が関わる機会は増えていていると感じます。

香川・^{ぶつしょうざん}仏生山温泉の“番台”であり建築家である岡昇平さんのように、建築家としてまちづくりを牽引していく人たちがもっと増えることで、新しいアイデンティティやキャラクター性のある街が生まれ、建築家が地方の未来を変えるトップランナーになれるのではないかと思います。

●私が手がけるプロジェクト

- ①竹田まちホテル：城下町をホテルに見立て、空き家の利活用を目的とした宿泊事業。
- ②トンネルの向う：トンネルを抜けた先にある、ある集落の緩やかに開発し続けるさまを楽しんでもらう商空間開発プロジェクト。



改修予定の古民家。
東屋として利用できない
かを検討中。

しま・ひと・たから

—ふるさと奄美大島の空き家から、次の時代につなげるプロジェクト—

1960年鹿児島県奄美大島生まれ。1986年芝浦工業大学修士課程修了。1991年アトリエ・天工人（テクト）、2015年奄美設計集団設立。都市住宅からリゾート建築、高齢者施設、まちづくりを国内外で手がける一方、震災復興支援や地域素材利活用など社会活動にも積極的に従事。

アトリエ・天工人
山下保博



私は鹿児島奄美大島の出身ですが、芝浦工業大学入学を機に上京して以来、ずっと東京を拠点に国内外での建築活動を続けてきました。以前は、正直なところ故郷の奄美をフィールドに積極的に仕事をしたいとは考えていませんでした。けれども2014年、行政より奄美の景観アドバイザーを依頼されたのを機に、翌年、奄美設計集団を設立し、東京、奄美、そして客員教授を務める九州大学の福岡と、活動拠点が3箇所になりました。ちょうどその頃、奄美でリゾートホテルの設計が始まり、故郷に仕事で行く頻度が増えました。

奄美大島は豊かな自然や美しい海だけではなく、集落ごとに家並みや風習に特徴があり、近くの沖縄とはまた違った文化や魅力をもっています。しかし、出張で頻繁に通うにつれ、空き家が増え、かつての伝統的な集落の風景が失われていく様子が目につくようになりました。また、行政や住民から空き家の活用について相談を受けることも多くなりました。

そこで、2016年より空き家を改修し宿泊施設とすることで「伝統的・伝説的な建築と集落と文化」を次の時代につなげる、「伝泊」の事業を開始しました。奄美イノベーションという会社を立ち上げ、設計だけでなく運営も手がけています。最初は奄美北部の2棟から始まり、2018年夏までに奄美大島、加計呂麻島、徳之島で15棟までに広がりました。

伝泊を始めたのと同じ頃、奄美空港から車で約10分という利便性の良い赤木名集落の中心で、スーパーマーケットが廃業後何年も放置されていることに気がつきました。かつては地域住民がにぎやかに交流していた場所です。思い切って自ら買い取り、かねてより構想していた地域包括ケア的な施設として改修する決意をしました。

その構想とは、10年前にドイツのベートルという街を訪れた時に芽生えたものです。障がい者やてんかん患者、高齢者が健常者と分け隔てなく生活している様子に感銘を受けました。高齢者施設の勉強会や九州大学でのまちづくりの授業でスタディを重ね、日本社会事業大学専門職大学院の井上由起子教授や、鹿児島で高齢者施設を運

営する中、迎^{なかむかえ}聡子さん、奄美と東京を跨ぎながら業務コンサルタントや奄美市産業創出プロデューサーの活動をするサイバー大学教授の勝眞一郎さん、在宅ケア・訪問診療を实践する「ファミリークリニックネリヤ」の徳田英弘さんなど、考え方を共有できる心強いメンバーに出会う中で、構想を具体化していくことができました。

完成した施設の名称は「伝泊+まーぐん広場・赤木名」。「まーぐん」とは、多種多様なモノゴトが交わりあい、融合するという奄美の方言です。ホテル形式の伝泊と、イベントスペースにもなる飲食店、物販、高齢者施設の複合施設として2018年7月にオープンしました。いずれは障がい者の就労支援も行い、ベートルのように高齢者、障がい者、地域住民、観光客が生き生きと交流する拠点を目指しています。

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」は世界自然遺産の推薦候補で、登録により観光客の増加が予想されます。空き家や空き施設の利活用は、集落の風景を残しながら観光の受け皿を作る有効な手段です。また、伝泊とまーぐん広場では、観光客と地域住民が交流できる仕組みやイベントを通じ、奄美の伝統や文化を人と人の交流によって伝えていきます。

「しま・ひと・たから」は私が講演などでいつも使うタイトルですが、どんな地域にとっても「ひと」が一番の宝です。そんな「ひと」同士が生き生きと交流し、伝統や文化を伝えていけるよう、今後も伝泊やまーぐん広場をさらに展開し、地域を元気にしていきたいと考えています。



「伝泊+まーぐん広場・赤木名」（奄美市笠利町）

抱負を語る

将来を決定付けた
出会い

長野県

俵周次郎



就職氷河期真盛りの90年代後半に大学を卒業した私は、地元の住宅メーカーに拾われるかたちで建築業界で働き始めました。配属されたのは設計と積算を行う部署。営業マンと技術者の割合が明らかに偏った組織により、住宅の設計と積算を1ヵ月に10件ほどこなす超多忙な日々を過ごすことになります。学校で習った設計とのギャップに戸惑いつつも、これが社会人というものだと言いつつも、毎日深夜まで働いていました。しかし当然ながらそんな生活は長続きしません。2年ほど経った時に心も身体も悲鳴をあげ、逃げ出すように退職したのです。

会社を退職をしたものの、次に行くあてもなく建築業界に夢も希望も持てず途方に暮れていたある日、ふと立ち寄った本屋さんで本を手に取りました。JIA長野県クラブが出版をしている『「愛と情熱の家づくり」建築家31人の物語』という本です。長野県内で活躍する建築家の作品やインタビューが載った、素晴らしい本の創刊号でした。「これだ」。自分の進むべき道を明るく照らしてくれた1冊でした。

その後、私は建築士の資格を取り、設計事務所で働き始めました。そして2013年に独立開業。ぼちぼちと実績もできてきた開業5年の昨年、自分の将来を決定付けてくれたJIAに入会させていただいたのです。

今年3月に『信州の建築家とつくる家 vol.14』が出版され、私の作品も掲載していただきました。20年近く前に出会った本の第14巻です。



『信州の建築家とつくる家 vol.14』

今現在、ようやくスタート地点に立ったような気がしています。自分の描く建築家像からはまだまだ遠く、周りの諸先輩方から学びながら、一步一步設計道を邁進していこうと考えています。

抱負を語る

古いものから学ぶ
デザイン + α

新潟県

カワサキユウスケ



若いころから設計事務所を志していたわけでも、有名な先生に師事してきたわけでもなく、ましてや設計事務所で勤めたこともない、一地方都市の田舎でスタートした私。建築家を名乗るなんておこがましいと思っていますが、さまざまな方からお声掛けいただき、JIAに入会することにしました。皆様、よろしくお願いいたします。

私は、大正から戦前にかけての建築、「洋」の要素が取り入れられた「和」といった建築が好みで、主にそのようなテイストで提案しています。特に最近は、昭和家電のデザインが気になり、現事務所では、真っ赤なブラウン管テレビ、フォントが特徴的な振り子時計、花柄魔法瓶、そんなものに囲まれて仕事をしています。

それにしても、私はなぜ昭和家電のデザインが格好いいと感じるのか？ 何が格好いい要素なのか？ そんなことを考えながら深く観察してみると、みな特にコンセプトを感じないということに気がきます。というのも、テレビがある程度普及した後、何をもって差別化するかとなった時の「とりあえず側を赤くしてみるか」、テレビの側を赤くする理由なんて多分ないです。ただ赤くしてみただけ。同様に、時計の数字が読みにくいフォントである理由なんてない。ただ数字を面白くしてみただけ。

ある程度、機能が満たされた後、とりあえず何でもいからプラスしてみるというちょっとしたノリが、私の琴線に触れるようです。そしてそんなノリが、私が好む建築にも通じているということにも気がきます。

ではこれからの時代、ある程度満たされた後に、さらに何かをプラスするとなったら、私は一体何をプラスするのでしょうか。



昭和家電に囲まれた事務所

テーマ

今、サステナビリティを考える

開催日：2019年2月21日(木)～2月24日(日)

会場：みなとみらい線馬車道駅コンコース、横浜メディア・ビジネスセンター(YMBC)8Fなど

第30回JIA神奈川建築WEEKは、3年連続でみなとみらい線馬車道駅コンコースを中心に、かながわ建築祭2019「今、サステナビリティを考える」というテーマで2月21日～24日までの4日間開催しました。今年は大卒コン(卒業設計コンクール)と近代建築展の設置を例年より1日早め、シンポジウムや公開審査を最後の2日間に集中し、建築祭全体の効率化を図りました。

最終日前日に開かれたシンポジウム1では、昨年秋に催した建築フォーラムの“建築から環境へ”というテーマを継続し、環境設計という視点から制度、設備設計、環境デザインの専門家を招き、それぞれの立場で考える建築と環境の新しい関係や可能性を議論しました。同日、行われたシンポジウム2では、村野藤吾設計による現横浜市庁舎のこれまでの歴史と保存活用の是非を、歴史と再生の専門家に登壇いただき、市民を巻き込む白熱した討論となりました。一般の方から、現市庁舎が横浜市民にとっても日常の中のシンボルであることがわかるような発言もあり、改めて現市庁舎のあり方を議論する場がより必要であると考えさせられました。

同日に行われたJIA神奈川地域会の笠井三義氏による「横浜近代建築街歩き」には20名ほどが参加し、笠井氏独特の言い回しとわかりやすい説明に、参加者一同とて

も満足した様子うかがえました。

最終日は茶室コンペ、デザインアワード、大卒コンとイベントが目白押しで、コンコースが真剣な審査の場となり、緊張感の中に時折笑いもあり、最後の表彰式も大勢の学生とともに非常に晴れやかに行われ、成功裡に終わりました。

馬車道コンコースでのこうしたイベントでは、一般の方もぶらりと足を止め、待ち合わせがてらパネルを真剣に眺めている様子なども散見しました。やはり建築を開く、JIAの活動を広く一般の方にも理解していただくためにも、こうした活動を維持するだけでなく、さらに発展させなければならないということが再認識される良い機会となりました。

審査員の皆様をはじめ、横浜市、総合資格、そして多くの協力会、協賛会の皆様、またシンポジウム、展示など場所をお借りした関東学院大学、横浜高速鉄道様にもこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

かながわ建築祭
2019
実行委員長
柳澤 潤



シンポジウム1

「建築から環境へ」～環境デザインの課題と可能性について～

■開催日 2月23日(土) 13:30～15:30
■会場 横浜メディア・ビジネスセンター(YMBC)8F

21世紀は環境の世紀といわれ、さまざまな局面で「環境への配慮」が謳われています。そこで建築分野において何が求められ、何ができるのか、「環境デザインの課題と可能性」と題し、横浜市建築局の共催を得てシンポジウムを開催しました。

登壇者には、秋元孝之氏(芝浦工業大学教授)、荻原廣高氏(アラップ・アソシエイト、大阪工業大学客員教授)、末光弘和氏(建築家、SUEP代表)を迎え、司会進行はJIA神奈川の田井が務めました。

はじめに秋元氏から、「建築のゼロエネルギー化」と題し、省エネ法改正における概要説明、ZEH、BELLS、WELL認証等の世界的環境指針についての解説、また環境と健康面の相関性に

ついて示唆されました。荻原氏は、「環境デザインを支えるエンジニア」と題し、5項目(風土、季節・時間、連続性と結節点、余白、物語性)をキーワードに事例紹介。地場のポテンシャルを使い尽くす洞察力には目から鱗でした。末光氏は、「環境デザインと素材」と題し、地球環境の潜在的ポテンシャル=地力(太陽・地形・風・水・地熱・地場材等)をデザイン手法と解析を交え、数値を凌駕したデザインの可能性について解説されました。

後半は、地球温暖化における建築の未来についてのディスカッションとなり、将来都市的インフラが限界を迎える中、地域環境をどう維持していくか。地域の特性を活かした街づくりと環境抑制の双方を協調するコ・ベネフィットという取り組み

等、建主と建築家、そして行政をも巻き込んだ取り組みと啓蒙が肝要であるとの課題が共有化されました。

環境問題は、ともするとモラリスティックに陥りがちですが、実は建築家の創造性を掻き立てるデザインの可能性があると同時に、建築家の社会的意識が問われる事柄でもあります。しかしまだその意識は低く、今後もこの問題提起を継続することの大切さを実感しました。(田井勝馬)

パネリスト：秋元孝之(芝浦工業大学教授)

荻原廣高(アラップ・アソシエイト、大阪工業大学客員教授)

末光弘和(SUEP)

司 会：田井勝馬(田井勝馬建築設計工房)



シンポジウム1の様子

シンポジウム2

村野藤吾 横浜市庁舎の価値と可能性

■開催日 2月23日(土) 16:30~17:30

■会場 横浜メディア・ビジネスセンター(YMBC)8F

現在横浜では、新市庁舎の建設が進んでおり、2020年には村野藤吾設計の現市庁舎から新庁舎への移転が予定されています。そこで「村野藤吾 横浜市庁舎の価値と可能性」と題し、吉田鋼市(横浜国立大学名誉教授)、田原幸夫(京都工芸繊維大学教授)、笠井三義(カサイアーキテクチャルデザイン)の各氏に登壇いただき、シンポジウムを開催しました。「サステナビリティを考える」というテーマのもと、まちの資産をどのように継続、発展させていくかを探る、という趣旨です。なお、司会進行はJIA神奈川代表の小泉が務めました。

まず、笠井氏より市庁舎移転の経緯、既存庁舎の今後についてJIA神奈川から横浜市に提出された要望書についての説明があり、続いて吉田氏より現市庁舎の建築的特徴、時代性など、歴史的位置付けについての解説がありました。最後に田原氏より近現代建築の保存活用のあるべき姿、可能性についての提案がありました。その後のディスカッションでは、都市開発との共存をいかに探るかが取り上げられ、経済的な価値だけで判断することの危険性が指摘されました。また、シンポジウム1に登壇した荻原廣高氏(アラップ)からは、適切な改修を行い現代的な性能を担保していくことで環境負荷の削減を目指すべきというコメントも寄せられました。

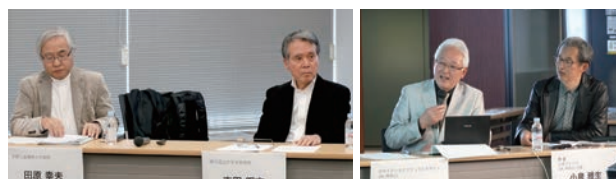
事前に新聞報道等されていたこともあり、80名ほどの参加者に来場いただきました。建築専門外の一般参加者も多く、会場からも質疑や意見が寄せられるなど、非常に熱を帯びたシンポジウムとなりました。これからどうまちが変わっていくのか、市民一人一人が自分ごととして考えていくことが求められます。次代に残していく横浜がどうあるべきか、今回のシンポジウムがまちのサステナビリティについて考えていくきっかけとなることが期待されます。(小泉雅生)

パネリスト：吉田鋼市(横浜国立大学名誉教授)

田原幸夫(京都工芸繊維大学教授)

笠井三義(カサイアーキテクチャルデザイン)

司 会：小泉雅生(小泉アトリエ)



左から、田原幸夫氏、吉田鋼市氏、笠井三義氏、小泉雅生氏



来場者の熱気に包まれたシンポジウム2の様子

今年の近代建築街歩きは、シンポジウム2「村野藤吾 横浜市庁舎の価値と可能性」に対応して企画しました。また、かながわ建築祭期間中、馬車道駅コンコースでは、横浜港町文化を形成する近代建築と神奈川県内の村野藤吾建築をパネル展示し紹介しました。

新市庁舎建設のため、今後の現庁舎については、民間コンペにより企画提案を4月以降に受け付け、9月には決定されるべく動き始めました。

現市庁舎は、1959年に竣工、横浜開港100周年記念事業として完成、築60年が経っています。今回の街歩きは、この現横浜市庁舎前から歩き始めました。

■港町魚市場跡

まず市庁舎右手の「港町魚市場跡」から解説を始めました。この市場は、高嶋嘉右衛門が、当時の県令(県知事)陸奥宗光から許可を得て、昭和6年に中央市場へ移転するまでこの地にありました。高嶋嘉右衛門は、江戸の木材商であり、開港と併せて外国人設計の洋館建設請負い、ガス事業、横浜駅周り(現桜木町)の鉄道敷の築造等、幅広く活躍した人物です。

この魚市場に関係したモニュメントが、現市庁舎の屋上にあります。投網を模したタワーで、建設当初は愛市の鐘が吊されており、定刻に鳴らしていました。

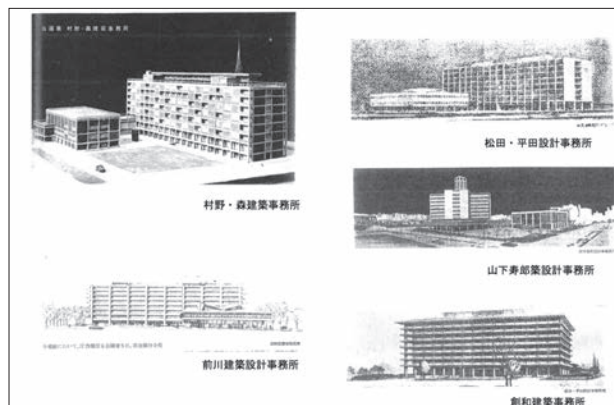
■現横浜市庁舎

現市庁舎は1956年に設計事務所5社による設計コンペでした。その中で、村野藤吾の案が一等になりました。コンペの模型写真を参照ください。

コンペの模型写真を見ても、この塔がすくっと立っており、村野藤吾のこの塔に賭ける執念が感じられます。また、このコンペは戦前のコンペと比べ大きな違いがありました。例えば、神奈川県庁舎では、プラン間取りは県の条件として提示され、その中で立面などデザインの提案がなされます。



上：港町魚市場跡、右：現横浜市庁舎



1956(昭和31)年、横浜市庁舎指名設計競技案

一方、この横浜市庁舎のコンペでは、戦後民主主義以降の市庁舎ということで、内部間取り、空間、デザインが問われました。村野藤吾は戦前にはない民主主義を形として表しました。

まず、8階建ての行政棟、4階建ての議会棟、それらを繋ぐ2階建ての市民ホール、どちらも正面性をあえてなくし、同じ質の建物を両サイド1スパンずつ伸ばしただけの車寄せに、2階梁位置に小さな看板「横濱市廳・横濱市会議事堂」だけ付けてあります。

立面的にも、細いシンプルな柱と梁により区切られたその内部に煉瓦タイルとバルコニーがランダムに配置され、ダブルフレームにより構造とデザインがバランスよくとられています。柱は2層ごとに細くなっており、外部から見てもリズム感あふれるシンプルな意匠となっています。

村野藤吾は、この横浜市庁舎以外にも多数設計を行っており、文化勲章、日本芸術院賞、日本建築学会賞を受賞し、また国指定重要文化財として「世界平和記念聖堂」、「宇部市民館」が選定されています。この現横浜市庁舎も、まだ60年しか経っていません。今後ぜひ100年クラスの建築として、保存、活用してもらいたいと思います。

行政棟は、10年前に総工費50億円かけて免震構造による改修がなされています。地下基礎下を使い続けながら、カットして免震ゴムを差し込むレトロフィット工法によるものです。これにより建物の構造耐力は現在考えられる安全性を満足しているものと考えられます。また、議会棟、市民ホールも耐震改修が同時期に行われていました。



横浜公園



神奈川県庁本館



象の鼻パーク

■横浜公園

さて市庁舎を後にして、「横浜公園」にきました。「横浜公園」は、開港当時、港崎遊郭があった場所です。慶応の大火(1866年)の後、ここが洋式公園として整備されました。これは当時の徳川幕府が大火の後、列強5カ国からの申し入れにより約束したひとつです。他にも、この前の日本大通り120フィート(約36メートル)防火帯、山手居留地の住宅地化、外人墓地、競馬場の整備、耐火建築の促進などが明治政府に引き継がれて完成しており、横浜の基盤になっています。

日本大通りには、「旧綿業会館」、「旧三井物産横浜ビル」、「情報文化センター(旧商工奨励館)」、「神奈川県庁本館」、「横浜地方裁判所」など、震災前後の建物があふれており、横浜の歴史的建造物の宝庫となっています。

■開港記念会館

「開港記念会館」は横浜開港50周年記念事業で建てられました。1917年竣工で国重要文化財の建物です。コンペ入選1等案をもとに横浜市建築課が実施設計を行いました。関東大震災(1923年)で建物はかなりの被害を被りましたが、横浜市建築課の努力により甦りました。また、塔もその後、復原されました。100年使われ続けている建物です。



開港記念会館

辰野式という赤煉瓦と白の御影石の水平線のパターンによる立面は、東京駅、盛岡銀行に繋がる当事の様式のひとつです。

■象の鼻パーク

「象の鼻パーク」は、横浜開港150周年の記念事業で、コンペにて2009年、小泉雅生氏により設計されました。1868年の地図には、すでに象の鼻の防波堤が見られ、その復元と日本大通りからの公園整備が基本となっています。タテ軸に日本大通りからの軸線、ヨコ軸に水際線

のプロムナード(山下公園・みなとみらい地区)の軸線を考え、象の鼻からのカーブを描くサークル状の照明やスクリーンを配置し、大きな風景をイメージしたと小泉氏の設計メモに書かれています。

3つの記念事業と各時代を繋ぐ建物を巡りながら、2時間街を歩きました。最後に馬車道コンコースの村野藤吾展前で説明を行い、無事に終了しました。(笠井三義)

参加者の感想

感想1

私は今まで目的地としてのスタジアム、市役所、県庁という点で見えていましたが、今回の街歩きでは時間を介した線で見ることができたのがよかったです。県庁も市役所もプロポで決まった設計者の建物ですが、意匠だけのプロポ、プランまで含めたプロポであったという過程の違いがあったことを知って、建物を見るとその表現の仕方の違いも興味深く楽しめました。今後も点でなく線で繋げていけたらと思います。

感想2

横浜出身の建築家・笠井三義さんが、街を歩きながら関内の成り立ちの歴史からはじまり、テーマとなる近代建築を解説してくれます。丁寧で建築愛にあふれる解説に加え、資料も豊富で、一般の方はもちろん、専門家にとっても毎回新たな発見があり、どちらも楽しめる大変人気のイベントです。

今回は天気もよく、横浜市の庁舎(設計：村野藤吾)からはじまり、スクラッチタイルを多く使った建物を中心に日本大通り、県庁、象の鼻パーク、馬車道駅と充実の建築散歩でした。

作品展示・公開審査 卒業設計コンクール

- 作品展示 2月21日(木)～24日(日)
- 公開審査 2月24日(日)
- 会場 みなとみらい線馬車道駅コンコース

今年も神奈川県下7大学から選抜された35作品が集まり、第30回目となる卒業設計コンクールが行われました。審査委員長は木下庸子氏、審査員は遠藤克彦氏、仲俊治氏、原田麻魚氏にお願いしました。今年も力作が多く、例年同様、白熱した審査会となりました。

午前は審査員が学生の展示作品を巡回審査して、1人5票+1票の投票を行い、上位10作品+1作品を選定しました。午後は公開審査の中、上位11作品の学生がプレゼンテーションを行いました。その後、審査員の方々の質疑と討論を経て、1人3票の投票を行い、上位3作品を選定しました。

公開審査後、審査員の方々と議論をしながら、金賞、銀賞、銅賞、審査員特別賞4作品を選定しました。並行して、一般の方々と学生達の投票によって決まる総合資格賞1作品の選定も行われました。その後の表彰式でも、ほぼ出展者全員が集まり、大いに盛り上がりしました。
(小山将史)

審査委員長：木下庸子(設計組織ADH)

審査員 遠藤克彦(遠藤克彦建築研究所)

仲俊治(仲建築設計スタジオ)

原田麻魚(MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO)



審査風景



展示の様子



受賞者と審査員

入賞者

金賞：織木を編む／笹原淳平(明治大学)
銀賞：expand／井上恵友(慶應義塾大学)
銅賞：日常をつなぐ架け橋／佐塚将太(神奈川大学)
木下賞：Scrap Board／岩見遙果(慶應義塾大学)
遠藤賞：裏山風呂暮らし／石田卓也(横浜国立大学)
仲賞：神保町古本キャンパス／藤田一摩(横浜国立大学)
原田賞：渋谷受肉計画／十文字萌(明治大学)
総合資格賞：空隙の秋葉原／前田沙希(神奈川大学)
なお、金賞と銀賞が全国大会へ進みます。

作品展示・公開審査

第3回 JIA 神奈川デザインアワード

- 作品展示 2月21日(木)～24日(日)
- 公開審査 2月24日(日)
- 会場 みなとみらい線馬車道駅コンコース

比較的穏やかな気候の中、「第3回 JIA 神奈川デザインアワード」が馬車道駅コンコースで開催されました。

今年は「今、サステナビリティを考える」というテーマで、審査委員長に野沢正光氏、審査員には近藤哲雄氏、馬場兼伸氏を迎え、お昼から夕方まで議論が交わされました。

1次審査では応募者の短いプレゼンテーションを受けた上で、各審査員に5票を投じてもらう方法で行われ、29組の中から8組に絞られ、2次審査は恒例の公開審査という形で議論が交わされた結果、最優秀賞1組、優秀賞2組が選出されました。

室伏次郎氏の「北嶺町の家」は、1次審査から審査員全員の満票で通過してそのまま2次審査で最優秀賞に選ばれたのですが、48年にわたって家族と共に変化してきた住宅は正に今回のテーマにぴったりで、審査員だけではなく会場にいた全員の満票だったと言っても過言ではないくらい説得力のあるものでした。

優秀賞は、星野千絵氏の「Book & Cafe stand Shinjo Gekijo」と笠井三義氏の「街のサステナビリティ(街歩きを通して)」。

最後には各審査員賞も発表され、気候と同じく終始穏やかな雰囲気の中、無事に終えることができたのですが、年々応募者



審査会の風景



審査風景



コンコースでの説明風景

数が減っている現状に、危機感を覚えたと同時に今後の対策を考えていかなければという思いが募った年でした。（納谷新）

審査委員長：野沢正光（野沢正光建築工房）

審査員：近藤哲雄（近藤哲雄建築設計事務所）

馬場兼信（ビーツーアーキテツツ）

入賞者

最優秀賞：北嶺町の家／室伏次郎

優秀賞：街のサステナビリティ（街歩きを通して）／笠井三義

Book & Cafe stand Shinjo Gekijo／星野千絵

野沢正光賞：ミナガーデン十日市場／飯田善彦

近藤哲雄賞：360°／納谷新

馬場兼信賞：ときにわオフィス／安田博道+石丸由美子、干場弓子



受賞者と審査員

作品展示・公開審査

一番小さな交流のかたち「2帖の茶室」

茶室デザインコンペティションは、毎年同じテーマ「一番小さな交流のかたち2帖の茶室」で、実際に建設することを前提に計画案を募りました。

この企画はJIA会員獲得の目的もあり、入会候補者に広く知っていただくためにインターネット上の複数の告知サイトを利用してJIA神奈川のHPとリンクさせ、建築士や学生に情報が届くように努力しました。お正月の締め切りにもかかわらず70案が集まり、建築祭に向けて実施案を3案選出しました。

審査はJIA神奈川代表の小泉雅生氏、スタジオアルテックの室伏次郎氏、堀越英嗣ARCHITECT 5の堀越英嗣氏、金箱構造設計事務所の金箱温春氏の4名にお願いし、選出された3案はそれぞれ、

「フィルムを積層させ深海の中のようなイメージを想起させる案」

「小さな紙を貼り合わせながら剛性を保ち空間を成立させる案」

「木格子をリズムと光の入り方を考えながら構成する案」

の個性豊かな案で、製作補助金10万円を用意し、各提案者に制作をお願いしました。

建築祭の会場に制作された3案から最優秀賞を選出し、表彰を行いました。（山口賢）

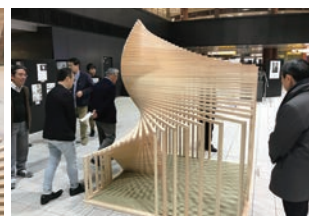
- 作品展示 2月21日（木）～24日（日）
- 公開審査 2月24日（日）
- 会場 みなとみらい線馬車道駅コンコース



会場の風景



審査風景



最優秀案

審査員：小泉雅生（小泉アトリエ）

室伏次郎（スタジオアルテック、神奈川大学名誉教授）

堀越英嗣（堀越英嗣ARCHITECT 5、芝浦工業大学教授）

金箱温春（金箱構造設計事務所、工学院大学特別専任教授）



cross × cross party（表彰式）の記念撮影

四国88カ所 建築巡礼について



四国支部
徳島地域会
清水裕旦

四国支部では、『建築巡礼 四国88カ所ガイドブック』というものを刊行しています。そして、数年に一度、各県で88建築を巡礼するツアーである「88ツアー」を開催しています。まず、その趣旨や流れを説明したいと思います。

建築巡礼四国88カ所とは

「私たちの建築巡礼四国88カ所は弘法大師が修行し悟りを開いた足跡をたどる四国霊場88カ所にちなんで巡りにちなんで構想された。

人々は霊場を巡りつつ、今もこの四国の地で同行二人、大師と共に御堂の佇まいに心を癒し自然に包まれ安らぎそして精神的な力を得て、明日を生きるための活力としている。驚かれるかもしれないが、このような霊場のもつ精神的な力は私たち建築家が生み出す建築作品にも宿っている。

明治時代の浄水場——入念に積まれた煉瓦の壁に、当時の人々の使命感が伝わってこないだろうか。

岬にそびえる灯台——風雨に耐えて建つ姿に、共感を覚え励まされないだろうか。

山間に佇む茶堂——使い込まれた造作に、神と自然と村人が集う生活を見ないだろうか。

コンクリート打放しの庁舎——見事に打たれた壁面に、建築家と技術者の英知と努力を感じないだろうか。」

(建築巡礼四国88カ所特別委員会委員長・山本忠司／『建築巡礼 四国88カ所ガイドブック』(vol.1) 巻頭より抜粋)

そこで、四国の優れた建築88作品を取り上げたガイドブックが1998年につくられました。その後、2014年にリストを更新し、vol.2がつくられました。



(右)『建築巡礼
四国88カ所ガイドブック』vol.1
(左) vol.2

88ツアーとは

ガイドブックには普段はなかなか体験できないプライベートな建築も多数掲載されていますが、掲載するだけでなく、そういった建築を実際に見る機会を提供することも大切です。また、同じ建築を皆で体験し、各々が感じたことや個性的な見方などを共有することで大変勉強になります。

88ツアーはそういった意味で非常に貴重な機会になり得ると思います。

2016年、88ツアー（高知）に参加して

前回の88ツアーは2016年に高知で開催されました。

まず最初に訪れたのが、「高知県知事公邸・私邸」(村野藤吾設計、1963年)。軽やかな箕甲屋根、それを支える柱は鉄骨を檜でカバーした細柱、雁行配置されたリズミカルな外観。桂離宮の写しとも思われる手法が各所に



「高知県知事公邸・私邸」軽やかな箕甲屋根



「高知県知事公邸・私邸」庭に面して雁行配置された外観



「沢田マンション」(高知) 外観



「沢田マンション」自由に出来上がったであろう路地空間

見られ、村野藤吾のデザインエッセンスが感じられる名建築でした。

次に訪れたのはセルフビルドで有名な「沢田マンション」。オーナーさんのお話も聞くことができましたし、なんといっても肩肘張っていない自由さには建築の原点みたいなものを感じさせられました。

これらの対照的な2つの建築を同時に体験することで学べるがありました。

今年の88ツアーは徳島で開催

そして今年は3月23日に徳島で開催しました。徳島では、「建築家の自邸」というコンセプトのツアーにしました。

1軒目のM邸(倚渦)は、スリット状の天窓から降り注ぐ光が美しく、グリッドを外さない端正なプランで、建築家のこだわりの強さが魅力的でした。

2軒目のT邸(サイタハウス4)は、天井高を限界まで下げたエントランスから、大きなトップライトがある吹き抜け空間に入った時の開放感が心地よい住宅でした。床レベル差をうまく利用して、ワンルーム空間をさりげなく分割していました。

3軒目のI邸(cow house)は、牛舎を改装し、母屋と繋げたユニークなプラン。明暗、新旧の二元対比が、面白いほど空間を豊かに作りあげていました。



M邸～倚渦(徳島)



T邸～サイタハウス4(徳島)



I邸～cow house(徳島)

以上、それぞれ建築家の個性が表現されていて、それらをまとめて見学することは非常に面白い体験となりました。

最後に、ガイドブックvol.1巻頭の山本忠司氏のことばで終わりにしたいと思います。

「四国建築88ヵ所を巡ることにより多くの人が建築作品のささやきに耳を傾け、それが心の支えになることを、また多くの建築に携わる人々が建築作品の語りかけを自らの糧とするよう祈っている。」

(建築巡礼四国88ヵ所特別委員会委員長・山本忠司／『建築巡礼 四国88ヵ所ガイドブック』(vol.1) 巻頭より抜粋)

実務訓練制度の あるべき姿と実施状況

—各国の資格で当然のことを日本で JIA が担う—



近藤 昇
本部建築家資格
制度実務委員会
委員長



安達治雄
職能・資格制度
委員会 前委員長



内野輝明
職能・資格制度
委員会 委員長

実務訓練は建築家になるための世界共通のプロセス

連載の前は、世界の建築家資格制度を動態として見れば、それが**実務訓練**を通じて建築家を育てるシステムであること、また、私たち登録建築家の認定において実務訓練よりも実績評価の比重が大きかったのは、次世代の建築家を育てる初代登録建築家を定めるためには仕方がなかったこと、これらを確認した。

私たちが推進しようとしている建築家資格制度の基本の姿は、UIA基準に照らして建築士法に足りない素養・能力・認識・職能観を**実務訓練**によって習得した者が、登録建築家として認定・登録されるというものである。そうである以上、実務訓練を指導する初代登録建築家が出揃ったと判断された時点で、実績評価という便法に重心を置くことの正当性は失われると言って良いであろう。

ではいつ、「出揃った」と言えるのか。JIA正会員のうち、認定要件を満たさない（または登録の意思のない）会員を除いた全員が登録した時点なのか、それとも制度開始後15年となった今日、すでにその時点と見なすのか。

この点は最後に考察することにして、まずはUIAアコードの実務訓練と、その実施例を見ておきたい。

UIAアコードに記載の実務訓練、および適用例

UIAアコードによる建築家資格制度の要点とは、(1) 建築専門教育（推奨5年以上）、(2) 実務訓練、(3) 資格審査・認定、(4) 継続職能研修（CPD）となっており、JIAが推進する建築家資格制度もこれに準拠している。

(2)の実務訓練をUIAアコードは「公益の保護を目的として〈中略〉正規教育課程で学んだ**内容の統合を図る**」ものと位置づけ、最低2年間（今後は3年間）の訓練を建築家資格取得の条件としている。アコードの細則に当たるガイドラインについては、この訓練を教育過程の単位と兼用してはならないこと、また過半を建築教育の基礎過程の後に実施することを求めた上で、訓練の4分野（業務遂行・経営、基本計画・設計、実施設計、監理）やその細かい達成目標、訓練の記録作成、監督者などについて規定している。

UIAアコードの適用例を各国別に記す紙幅はないが、米国NCARBでは修得時間の記録にスマートフォンのアプリを使えるようにしたり、選択を含め計5,600時間の履修だったのを必須修得科目3,740時間として、その先の必要時間数は各州に委ねるなど、改革を進めている。名称も、2016年にIDP（Intern Development Program）からAXP（Architectural Experience Program）へと改め、資格未取得の意匠系の実務経験者に対し、現在の雇用条件などから履修時間申請ができない場合に限り、業務経歴（申請直前5年間は除く）を「AXPポートフォリオ」として指導建築家経由で提出し、各分野の修得度をNCARBが判定するという方法を追加した。また一定条件のもと、修得時間合計の半分未満なら監督建築家の組織以外でも良しとするなど、UIAアコードの枠内ながら資格取得の道を広げる工夫をしている。

JIAが実施する実務訓練の制度設計1（履修関係）

建築家資格制度が細則で認定している実務訓練は、現在、JIAが実施する実務訓練プログラムのみである。訓練に参加できるのは一級建築士と、その受験資格のある者だが、このプログラムに参加するには、まず同じ組織に所属する登録建築家（本制度による）を「監督指導者」として選定した上で、実務訓練参加登録を行う必要がある。

参加登録を完了した者には、監督指導者経由、本部事務局から黒表紙の「**実務訓練ノート**」が支給され、これに沿って訓練が行われる。

3年以上の実務訓練により、700単位（7時間＝1単位）を取得することが訓練終了条件となる。訓練自体は通常の仕事の中での修得項目が多く、仕事と同時に単位取得ができる。訓練内容は11の履修科目分野「建築家としての倫理と行動」「プロジェクトマネジメント業務」「設計前業務」「基本計画業務」「基本設計業務」「実施設計業務」「工事発注に関する業務」「監理業務」「工事完成後業務」「事務所運営業務」「関連活動」に分かれ、各分野の指定単位の合計475単位が必須履修科目、残りの225単位は分野を問わない選択科目となる。なお、訓練中（ま

たは訓練開始前)に一級建築士資格を取得した人は、申請すれば選択科目100単位が免除となる。

実務訓練の制度設計2(指導・資格審査)

実務訓練者の指導は現役の登録建築家が行うが、訓練生がプログラムに沿って修得しているかの単位確認作業を行わなければならない。また年2回、訓練経過報告書を支部認定評議会へ提出しなければならない。訓練終了者は指導建築家経由で、終了証明書を建築家認定評議会へ提出することになる。

訓練を終了し、かつ一級建築士資格を取得するなど、所定基準を満たした者への評議会による資格認定審査は、現在は面接・プレゼンテーション(支部実務委員会が代行)および提出書類で判断するかたちだが、将来はUIA基準の認定試験を行う方向となっている。認定された者は登録手続きを行って晴れて登録建築家として認められ、以後継続職能研修(CPD)を続けていくことになる。

このように、日本で現在、UIAアコードに準拠する実務訓練制度は、JIAのプログラムのみとなっている。

このプログラムの参加者は順調に訓練を終了すれば実績評価による申請よりも早く登録建築家となり得るので、若くして活躍するための素地ともなろう。

実務訓練で一度取得した単位は一生有効で、途中で訓練を中断しても、提出済の訓練報告書があれば再開後にその単位は生かされる。例えば、ゼネコン等、依頼者との利益相反となる職域に転職した場合は実務訓練は中断となるが、再度登録建築家の組織に戻った場合には取得済の単位が合算される。なお、別の登録建築家の組織への転職も考えられ、指導建築家は1人とは限らない。

課題点と見直しへの方向性

現役の登録建築家は、未来を託す次世代の登録建築家を育てなければならない。その努力責務は建築家資格制度の規則にも定められている。今後、全国で実務訓練への参加者を増やす必要があるが、何より、参加しやすい実務訓練制度の環境を作らなければならない。例えば履修の一定範囲については、訓練場所を登録建築家の組織だけではなく、指導建築家の監督のもと、(依頼者との利益相反を生じない)すべての職域での実務経験へと広げる方法も検討すべきであろう。そして実務訓練中に指導登録建築家も訓練生も孤立化しないように、資格制度実務委員会を中心にサポートを行うことが重要になる。

～実務訓練制度を広めるために～

実務訓練参加者を雇用しないままで実務指導できるようにすることは、実務訓練の機会を増やす良い方法と考

えられるが、業務内容の外部漏洩リスクも考えられるので、インターンシップ等では、参加しやすいと同時に問題も防げる方法を検討する必要がある。

～必須単位と選択単位～

前述のように475単位が必須単位となっているが、必須科目の内容の効率化や、合計の700単位そのものの再考も、俎上に載せるべきと考えられる。

～建築士取得の単位参入の是非～

現在、申請で選択100単位分が免除されるが、必須単位の中からも免除単位を設定できると思われる。

登録建築家の質の可視化へ～その礎が実務訓練

建築家の質を保証する「資格」の構成要素は、すべて社会から見て分かるようになっているべきで、建築専門教育、実務訓練、資格審査(試験)、CPD、それぞれが可視化されて初めて建築家資格といえる。

これらの要素の中で、建築家という職能の真髄が次世代へ引き継がれていくのは、実務訓練においてである。建築家の育成、なかでも職能意識の育成は、実務を担いながら、プロフェッションのありようを指導者や周囲の実務者から学ぶ日々の積み重ねによる。それが可視化されず社会から見てブラックボックスのままでは、旧態依然とした徒弟制度の残滓と見られかねない。実務訓練制度は、この育成過程の可視化でもある。学びは訓練生にとどまらない。指導者同士の情報共有により、登録建築家自身もより広い視野をもつ、社会性の高い建築家へと成長できるであろうことは容易に想像できる。

はじめの設問への回答は自ずと、「現在の“実績評価による認定がほとんど”という状態を脱し、NCARBの例も参考に現実的な訓練方法を鍛えつつ、登録建築家を監督指導者とする**実務訓練を中心に据える**べきで、それが資格の本来の姿である」となるだろう。

そしてこの答えは、建築家を育てるシステムを可視化して建築家への信頼を得ること、社会に求められる建築家を輩出することを最重要事項とするという、**意識の転換**をも求めている。前回の末尾にも書いたように、登録建築家数は増えるべきだし、人数は即、制度の存続に関わるが、それ以上に、資格の質の高さによる**公益保護**こそが重要であることに異論を挟む者はいないであろう。

そして、この意識転換のもう一つの重要な側面は、実績評価が過去ベースであるのに対し、実務訓練の重視は未来ベースの考え方である、という点だ。建築家の未来を自ら創っていく。JIAの設立趣旨そのものである。

今回は、この未来ベースの思考の現場、訓練の様子をお伝えしたいと思う。

デンマークあかり紀行

—照明デザイナーの視点—



永島和弘

デンマークの旅

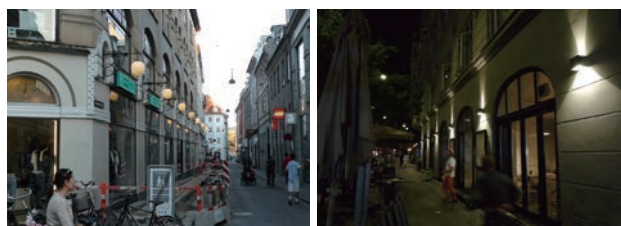
職業柄、旅行に行くについ照明のことが気になって夜の街を散策してしまう。今回はデンマークを旅した時のことについて書いていこうと思う。

ヨーロッパ圏の街は古い街並みが多く残っているから、道路も昔からのままの広さで残っている場所が多い。地震もない(全くないのかどうかはわからないが、以前高校生の友人に聞いたところ、地震を体験したことはないと言っていた)ようなので、東京のようなスクラップ&ビルドというような“街の循環”もない。建物も街路も古い昔のものが残ったままだと、照明の手法や明るさも日本とは違った環境になってくるからますますおもしろい。

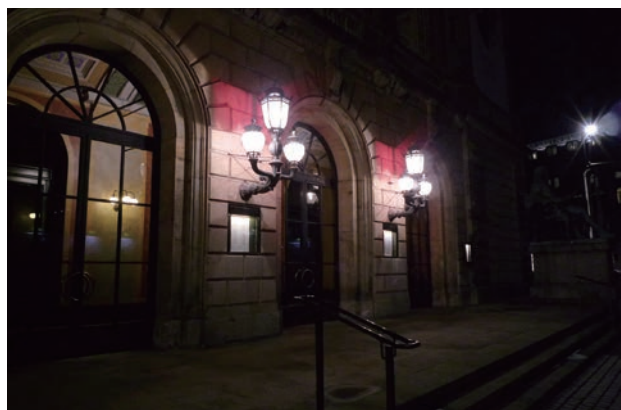
しかも、コペンハーゲンは先鋭的な建築や街もどんどんできていくから、新旧どちらも見られる街でもある。

街路の照明手法の違い

デンマークの夜の街はとても暗い。東京と比べればもちろんそうだが、ほかのヨーロッパの街と比べても暗いように感じる。しかし、ただ暗いだけというのではなく、



① ②



③コペンハーゲンの街路

どことなく品がある。人通りのあるところが限られている(街がコンパクトである)というのもあると思うが、街路の明るさを取るためのポール灯がほとんどない。その代わりに、建物の外壁にブラケットライトが多く設置されている。建物のデザインに合わせてブラケットライトの形状や光の出かたもさまざまな種類がある。それらを見ているだけでも夜の街の散策が大変楽しい。特にデンマークは、緯度の高い国なので冬に行けば夜は長いし、夏に行けば気候が良く、夜の散策をしやすい。結果1年中いつ行っても照明デザイナーにとってはオンシーズンということになるので、得した気分だ(写真①②③)。

街路の明るさをとるために、建物が照明をつけて街を照らす。建築と街が一体で存在しているようで大変うらやましい。日本で同じようなことをするのは難しいだろう。日本では、建物と道路(歩道)は管理者が別でそれぞれに敷地内(道路内)の照度基準を満たすように計画をする。しかもどちらか一方だけで明るさが満たされるとしても、どちらかだけがあれば良いとはならない。そして明るさだけでなく照明器具自体の存在感としても煩雑になるケースが多いように感じる。デンマークの外壁のブラケットライトは、建築と街をつなぐツールとして、敷地境界という実際には見えない境界を越えていて、照明デザイナー的にとてもワクワクした。

オリジナルを大事にすること

デンマークも日本と同様、古いものを大事にしつつ、新しいデザインが存在する国である。首都であるコペンハーゲンから北に行ったところにルイジアナ近代美術館というきれいな美術館がある。もとは邸宅で、それを改築して美術館にしたそうである(写真④⑤)。建物や設



④ルイジアナ近代美術館



⑤美術館の中庭



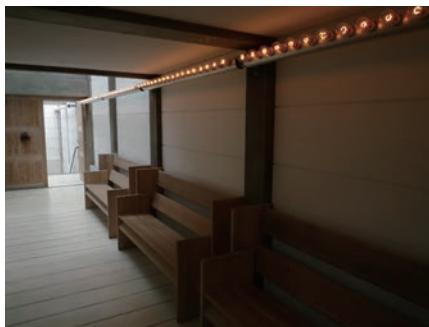
⑥ルイジアナ近代美術館展示スペース



⑦白熱電球スポットライト



⑧ヨーン・ウッツォン設計のバウスヴェア教会



⑨連続ブラケットライト



⑩廊下がペンダントでリビングに！



⑪ダウンライトにしたいところをペンダント！

備は古いが、メンテナンスが行き届いている。その一例が(というか照明ばかりが気になるのだが) 作品を照射しているスポットライトだ。かなりの年代物で、光源は白熱電球。

光源の話をしうると、かつては白熱電球しか光源はなかったために、白熱電球でスポットライトを作っていた。ハロゲン電球ならば点光源なのでスポットライトを作るのが比較的簡単なのだが、白熱電球で光を集光させるにはフィラメントが長いと、反射板も大きくしなければならない。そのため器具も大きくなるので器具設計が難しい。そんな白熱電球のスポットライトで作品が照らされていて、古い器具の活躍に感激した(写真⑥⑦)。しかし、照明デザイナーの私としては、消費電力がどの程度になるか気になってしまふのが職業病なところである。

消費電力が気になると言えば、ヨーン・ウッツォン設計のバウスヴェア教会。ハイサイドライトから優しく外光が入ってくる素敵な教会だが、ダウンライトのような建築化照明は一切なく、オリジナル設計の連続ブラケットライトのみでの照明(写真⑧⑨)。しかも、その光源はすべて白熱電球(確認したところ25W/灯)。現代の日本では、消費電力を考えても、ランプメンテナンスの手間を考えても、絶対にできない設計に驚愕した。ランプメンテナンスは、かなりの頻度で行わなければいけないはずだが、球切れしているものはほとんどなかった。こうして見てみると、オリジナルを大事に使うということが自然と行われているように感じる。設計者に敬意の念すら感じられるのである。

やっぱりペンダントライト！

先にも書いたようにデンマークは地震がないからなのか、私の感覚ではダウンライトで照明する空間をペンダントライトで照明する建物が多いように感じた。照明効率(床面照度)という観点で設計する現代では、とにかく明るさをいかに効率よく、かつ安価にメンテナンスフリーで行うことができるのかを追求しがちである。そこをデンマークでは効率という観点では劣るペンダントライトを使って、廊下のような効率を優先しがちな動線を照明する。すると廊下がまるで居室のように変化するのである。ペンダントライトは使うべくして使うと勘違いしているが、逆にデンマークではペンダントライトがあるところがリラックススペースなのだろう。ペンダントライトを自然に使う感覚が新鮮で(全くの古典的な手法であるが) 嬉しい発見であった(写真⑩⑪)。

余談であるが、知らない街を夜にウロウロするのは安全上危険な場合が多いのだが、ことコペンハーゲンはその危険を全くと言っていいほど感じなかった。夜遅い時間に女性が一人で歩いていることは東京以外ではあまり見かけない光景なのだが、コペンハーゲンではかなり見かけた。安全性と明るさは実はあまり関係性がないのではないだろうか(コペンハーゲンの街はかなり暗かった)。

永島 和弘 (ながしま かずひろ)

照明デザイナー

1978年千葉県生まれ。2001年、東海大学工学部建築学科卒業。2001年、LIGHTDESIGN INC.に入所。2012年、合同会社チップスを設立。

なめかわ

行川さをり氏に聞く 空間をつくるように 自分の音楽を表現したい

今回お話をうかがったのは、ジャズやブラジル音楽のボーカリストとして都内を中心に活動されている行川さをりさん。ブラジル音楽の声や音に魅せられ、ただ歌詞を歌うのではなく、声を楽器のように表現して音楽をつくり出しています。建築学科のご出身ということもあり、音と空間のあり方など、ご自身が目指す音楽についてお話しいただきました。



— どのような音楽活動をされているのでしょうか。

ジャズやブラジル音楽を歌うボーカリストとして、ライブハウスや食事をする場などで生演奏しています。ブラジル音楽の中でもボサノバやブラジルのポピュラーミュージックを歌っています。また、ジャズにはその場で集まった人たちが曲の中で即興的に表現する“セッション”というスタイルがあります。私はその中で歌うセッションボーカリストとして活動しています。

この他にCMやテレビ番組の音楽の仕事もしています。

ボーカリストとしては2通りの歌い方をしており、ひとつは歌詞を歌うもの、もうひとつは歌詞ではなく声を使って楽器と同じように奏でるもので、ヴォーカリーズというものです。この時の声を私はインストゥルメンタルボイスと呼んでいます。私がとても尊敬しているダイアン・リーヴスというジャズボーカリストがいて、彼女が自分の声をインストゥルメンタルボイスと言っています。楽器（インストゥルメンタル）的な声ということですね。私自身も声を音として扱っている感覚でしたので、同じようにインストゥルメンタルボイスという言葉を使っています。

— セッションボーカリストとはどのようなものですか。

私のライブでは譜面のまま演奏することはほとんどありません。毎回1度切りのものです。私の音楽のベースはジャズですが、ジャズには、1コーラス目はメロディーを、2コーラス目以降はそのコード進行上でメロディーから離れて即興で演奏し、またラストコーラスでメロディーを演奏する形式があります。ブラジル音楽をやる時も同様に、即興的な要素を入れて演奏しています。集まった人たちのバックグラウンドで音楽が変わっていく、それがジャズであり、セッションの醍醐味です。私はそのような演奏の場で歌っています。

— 大学では建築を学ばれていますね。歌手になったきっかけを教えてください。

音楽を始めたのは大学に入ってからで、ジャズに興味

があったのでジャズサークルに入りました。もともと歌を歌うことは好きでしたし、外国語の発音をするのが好きだったのでボーカリストになりました。

日本はジャズライブハウスが多い国なんです。とくに東京は毎晩どこかでジャズの演奏をしていますし、ライブハウスは今も増えています。他の音楽ジャンルだと、どこかで演奏したい場合はチケットをたくさん売らなくてはならないなどハードルがあると思いますが、セッションというスタイルだと、バンドをもっていなくても譜面を1枚持って飛び込みで共演させていただき、お店やミュージシャンからOKが出ればレギュラーで演奏することができるようになります。そのようにして学生時代からライブハウスで歌わせてもらっていました。

学部を卒業したあと、大学院では音響を学び、空間の響きをどのように捉えて記述するかといった研究をしていました。だんだん建築より響いているもの自体に興味がいってしまっ……。卒業後は広告会社に就職し、しばらく音楽活動はしていませんでした。

— 音楽活動を再開したきっかけは何だったのでしょうか。

20代前半に、ジャズを通してボサノバを知り、ブラジル音楽に出会ったことが大きかったです。それから、ちょうどその頃、声や音の響きに興味があって、声を使って音をどのようにつくり出せるかを考えたいと思っていました。次第にその思いが強くなり、20代後半に音楽活動を再開しました。その頃からライブ活動を増やし始め、CMの仕事も少しずついただくようになりました。

— ブラジル音楽のどのような部分に惹かれたのですか。

ブラジル音楽の歌詞はポルトガル語ですが、ポルトガル語は母音の数が30以上あるといわれており、音の響きがとても多彩です。私の発声や声色の美学は、ポルトガル語から学びました。私はいろんな声を出すのが好きで、さまざまな音源を聞いて真似をしながら自分の声をどう活かせるか研究しました。ですから、今の自分の声はブラジル音楽からもらったもので、それを音楽にして



左：spor (ギター：露木達也)
右：笙箏演奏@近江楽堂
(笙：大塚惇平、箏：今西紅雪)

いく力は、ジャズがベースになっていると思います。

また、ブラジル音楽に限らず、世界中にはさまざまな民族音楽があって、その土地固有の音楽の成り立ちがあるので、とても圧倒されますし興味深いです。

——行川さんが目指す声・音とはどのようなものですか。

私はこれまで、声色や響きの表現について考えて演奏してきました。声ひとつでその場の空気を変えることに興味があって、表現や音色そのものがどういう美学を持っているかが大切だと思うのです。そういう声の面白さに取り憑かれて今までやってきました。

それから、音楽はつくりこんで複雑にしていく方向もありますが、音楽家は音楽をやる以前にひとりの人間ですから、その人自身を感じさせるシンプルな表現の中に豊かさを感じます。表現しようとする表現は美しくない。素で出てくる音楽的な美しさを、私自身も追究していきたいです。

——音楽を通して空間をどのように捉えていますか。

自分にとって建築・空間というものに近いものではなかったという結論ではありません。ただ、空間を設計するより、その場の空気や雰囲気に興味があったのです。空間に音を響かせて表現することで、自分が空間そのものになっていく。その感覚をずっと持っています。音楽の中で空間感覚を持ちながら音を出す。それは、建築を学んだことで得られた感覚であり、自分らしい表現であると感じています。

——現在組まれているユニットについて教えてください。

私はボーカリストとして活動していますが、いろいろな方とユニットを組んで演奏しています。「phacoscapes (ファコスケイプ)」はピアノとクラリネットとボーカルというトリオ構成で、即興的にその場でストーリーを作り作曲していくユニットです。それから、「spor (スポール)」というギターとボーカルのユニットでも活動しています。表現に焦点をあてて活動していましたが、ここ

数年で、もう一度自分のベースになる音楽を勉強したいと思い、このデュオではブラジル音楽をメインに演奏しています。

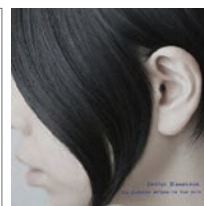
その他にも、^{しょう}笙と^こお箏とのトリオや、2人のドラムとのトリオといった面白い組み合わせでも演奏しています。

——10年前とは目指す音楽が変化していますね。これからの活動について教えてください。

これまで、自分の表現を広げるためにブラジル音楽を演奏してきました。その中でポルトガル語の響きを学び、自分の声の表現を構築してきました。これからは、少し声から離れて、自分の音楽のベースを作っていこうと思っています。さまざまな楽曲ならではのリズムや美しさをどのように伝えられるか挑戦していきたいと思っています。

——貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

インタビュー：2019年2月13日
聞き手：小山将史 (『Bulletin』編集 WG)



リリース作品。左から、「[-scapes,]」(phacoscapes, 2015)、「Fading Time」(行川さをり、2013)、「Se pudesse entrar na sua vida —もし、あなたの人生に入ることができるなら—」(行川さをり、2010)

PROFILE

行川 さをり (なめかわ さをり)

ボーカリスト

JazzとBrazil音楽を歌うセッションボーカリストとして都内を中心に活動。本来の歌唱法にとらわれず、絵を描くような、自由で即興的な声の表現が特徴。Dianneへのリスペクトを持ちながら、独自の「インストゥルメンタルヴォイス」によるオリジナルな空間表現を目指している。2015年12月にはリーダートリオ phacoscapes (ファコスケイプ：ピアノ伊藤志宏・クラリネット土井徳浩とのトリオ) 名義で「[-scapes,]」をリリース。このほか、TVCMでの歌唱やコンピレーションアルバムへの参加など、幅広く活動している。www.namekawasawori.com

『ライトの遺言』



椎名英三

昨年のことだ。講演会の資料に使いたいと思い、僕が建築と初めて出会った映画「摩天楼」のポスターを探しながら、それがあるとは思わずに、初めて読んだ建築の本といってもいい『ライトの遺言』限定1,000部のハードカバー本をAmazonで探してみたら、売りに出されていて、大いなる驚きを感じながらも即注文した。

大学2年生の時だった。夏休みの自由課題として、「摩天楼」のモデルにもなったフランク・ロイド・ライトと特に帝国ホテルについて研究することにした。そして後になって日大の名物教授になった近江榮先生(当時は助教授)の研究室に行き、参考資料を漁っていたら、そのハードカバーの『ライトの遺言』と出会ったのだった。

早速その本を研究室から借りて読み始めた。そしてどうだろう、一見難しそうに思えた文章は、僕の心の中にぐさりぐさりと突き刺さってきたのだった。僕は思わず、それが借りてきた本であったのにもかかわらず、心に響いた文章にアンダーラインを引いてしまった。かくしてこの本はアンダーラインで埋まってしまった。若い僕は、「これは俺の本だ!」という気持ちになってしまっていたのだ。しかし卒業を間近に控えたある日、研究室より、本を返却せよという連絡があり、僕のアンダーラインで埋まった『ライトの遺言』は、哀しくも僕の手元から去ってしまった。その後、古本屋を巡り歩いたが、この本を見つけることはできなかった。そして、50年以上を経て『ライトの遺言』と再会したのだ。

半世紀前に出会ったライトの言葉は、今でも覚えているものがある。“NATURE OF NATURE”、老子の「建築の真実性は、屋根や壁にあるのではなく、それらによって囲まれた内部の空間にある」、「この世に生を受けた全ての人間は、何者にも妨げられず、ゼロより彼等になし得る最高の自己表現へと成長すべく平等の権利を持っている」、「凡庸の高き地位への上昇」。

今回手元に届いた本は、古本とは思えないほど新しく、函入りであり、翻訳者である谷川夫妻の解説書も付いていた。その中で谷川夫人は、この本の中に頻繁に出てくる語として、nature, organic, intrinsicがあるということ

を指摘していた。前2語は知っていたが、intrinsicは知らなかった。それは「内在的」と訳される。内部から外部へ、内なるものの発露として外なるものがあると主張しているライトの考えのキーワードの一つだったのだ。果たしてそれらの言葉は今日でも有効性を保持しているだろうか。内と外の乖離は今日の状況の前では必然なのだろうか、否、intrinsicなる概念は、本物の建築へと至るための、時代を超えた真実の概念なのだと僕は思うのだ。

かくして僕は、手元にある『ライトの遺言』を開いた。それは50年前に読んだ時よりも読みにくかったのだが、ライトの力強い言葉は伝わってきた。そして、「詩的本質」という概念が頻繁に登場していることに気付いた。建築の根源は、生命を豊かにすることだというライトは、「詩的本質」を保持することこそが、建築が高みへと至るためになくてはならないものなのだと叫んでいるのだ。

ライトは言う、「社会に美を育成するために、市民は再び人生を詩的なものとして、詩的本質を道標として、みなくてはならない」、「人間は彼が考えたいかなる制度よりも常に偉大である」、「人間の光は、本性以上のものである。この内なる光によって人間は生まれ、思いつき、創造する。そして人間の中に宿るこの光として、実在の光を存続させるためにのみ死ぬ。精神はそれによって啓蒙され、彼の生命は光となり、それは彼より出でて人間を照らすようになる。人間の生命と、仕事の中にあるこの光を肯定することは、人間の本当の幸せである。人間の良心にとって、この内なる光の閃光より以上のものはない。我々はそれを美と呼ぶ。美はしかし、人間の光の輝きである」、「人類は、この内なる光に色々な名前を付けてきた。例えば魂と呼ぶように。真に人道的なるものを言い表し得る恐らく唯一のセンスは、神性であろう。絶対的な死とか、全くの悪というようなものはあり得ない。全ては何らかのフォームで、光から出たものである」。

そして僕は、今1人の敬愛する建築家ルイス・カーンを思い起こしていた。



限定1,000部の『ライトの遺言』

交流委員会 Cグループ

建物見学会「長崎」報告



交流委員会
法人協力 Cグループ
ニッター
日東英成

法人協会員 Cグループは、ALC、石材、タイル、屋根材、金属、建具などを扱う施工業者、メーカー等、非常にバラエティに富んだ構成となっています。毎年2月に「建物見学会」を開催し、会員企業の工場視察や地方の優秀な建築作品、歴史遺産などを視察しています。

2月8日、9日の2日間、キリシタン関連遺産と明治の産業革命遺産のある「長崎」を訪問したのでご報告します。

1日目、最初に訪れたのは日本の近代化に大きな役割を果たした三菱重工業発祥の「長崎造船所」です。明治31年に建築された赤煉瓦の建物は、木型場として建設された最も古い建物です。建物内部には、日本最古の工作機械をはじめ発電設備や魚雷、手がけた数々の客船や戦艦について紹介されていました。

長崎県では平成12年に環長崎港地域アーバンデザインシステムが採用され、より質の高いデザインを創出する取り組みをしています。「長崎県庁」は新長崎駅舎から女神大橋への眺望が配慮され、また防災の重要拠点に位置付けられています。海の玄関口である「長崎港ターミナルビル」は幾何学デザインが印象的でした。

また、長崎は香港、モナコとともに世界新三大夜景に認定されていて、美しい夜景も見どころです。国宝「大浦天主堂」もライトアップされ、日本の近代化に影響を与えたグラバー氏のグラバー園からは長崎港を望むことができました。

今回、ちょうど長崎ランタンフェスティバルが開催されていました。もともとは中国の旧正月（春節）を祝う

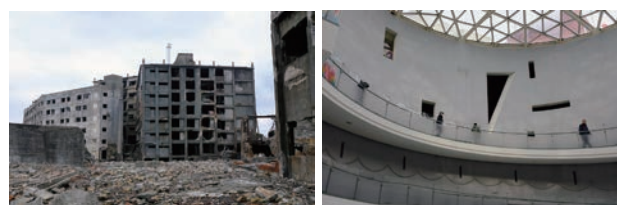


三菱重工業長崎造船所史料館にて。参加者は15名。

イベントですが、新地中華街を中心に長崎の冬を彩る一大フェスティバルになっています。期間中は踊りや演奏などが開催され、多くの人で賑わいます。

2日目は、長崎港から18kmの海上にある「軍艦島」に行きました。軍艦島は、かつて“黒いダイヤ”と言われた石炭によって国家のエネルギー供給基地として、明治、大正、昭和を支えました。当時世界一の人口密度で、東京都の約9倍だったといえます。その要請から日本初の高層鉄筋コンクリート造アパートが建設されました。1974年、エネルギーが石炭から石油に転換したことによって軍艦島は無人島になりました。採掘と台風の中で人びとが闘い抜いたその痕跡に触れることができ、一同感銘を受けました。

次に、第二次世界大戦末期に広島と並び、原爆投下による甚大な被害を受けた惨状を伝える「長崎原爆資料館」に行きました。核兵器の廃絶と恒久平和を世界に訴える建築の役割を強く感じました。



鉦員アパート30号棟(1916年日本初RC) 長崎原爆資料館(1996年)

2日間という駆け足での長崎でしたが、歴史を背景に力強い街づくりに感動しました。私たちも次世代へと続く街づくりに寄与できるよう思いを新たにしました。

最後に、建物見学会はCグループ主催ではありますが、飛び入り参加も大歓迎です。ご興味がある方はぜひ気兼ねなく、お声がけいただければ幸いです。来年も充実した企画で楽しく学び、交流を図りたいと考えています。



長崎県庁(2018年)



長崎港ターミナルビル(1995年)



グラバー園からの夜景



長崎ランタンフェスティバル

交流委員会 Eグループ

JIAの活動に参加して



交流委員会
法人協力Eグループ
副代表幹事
中電工
石津浩章

広島から東京転勤と同時にJIA法人会員の担当となり、早いもので3年が経過しようとしています。着任して間もなく事務局から送られてきた交流委員会幹事会開催のメールを拝見し、出席させていただくことになり、こんなにも早く多くの方と交流できることに胸を膨らませたことをよく覚えています。

昨年は全国で地震や台風による災害が発生し、故郷の広島も豪雨災害に見舞われ、家族が一時避難するなど今まで経験したことのない大変な状況に胸を痛めました。災害復旧作業には当社も参加し、微力ではありますが地域の方々に貢献できたと思います。また元日のニューイヤー駅伝では、当社は昨年35位から今年は13位と順位を上げ、歴代最高の記録を達成することができました。

建設業界では、東京オリンピック・パラリンピック効果もあり、建設ラッシュが続いています。当社もさまざまな環境の変化に対応しながら、対策を講じているところ です。



毎年恒例の納涼屋形船からの施設見学会



船上から高層ビル群のライトアップを鑑賞

Eグループの活動は、7月の納涼屋形船からの施設見学会と年末のグループ会議後の懇親会が恒例の行事となっています。毎回、正会員の方々の参加者が増える中、東京湾で屋形船の船上から見渡せる高層ビル群や大型施設のライトアップを鑑賞し、時代の移り変わりを肌で感じながら、多くの意見や考えを出し合える場となりました。

また、定期的に開催しているEグループ会議では、会員の出席率が非常に高く、中身の濃い会議が毎回実施されています。そして熱い議論そのまま懇親会から二次会へと移っていくのですが、その状況は特に説明しなくても容易に想像できるのではないかと思います。

私は昨年5月にEグループの副代表幹事を拝命し、JIA2018東京大会では、微力ながら正会員・法人会員関係者の皆様方と共に大会を盛り上げることができ、大変貴重な経験をさせていただきました。この経験を生かして、今後も交流委員会の活動を通じ、より多くの正会員や法人会員の皆様と交流を深めることができればと思います。

今年は、法人会員から積極的に各委員会に出席することで、正会員主催の活動にも参加し、法人会員としてのメリットである正会員との情報交換ができる機会を増やしていければと思います。

広島カープの勝敗で父親の機嫌が左右される環境で育ったこともあり、根っからのカープファンであるの言うまでもありませんが、3年連続リーグ優勝の勢いに乗り、交流委員会も盛り上げてまいりたいと思いますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。



施設見学会での集合写真

キーワードで繋がるコミュニティ

「えねこや」の活動を通して感じる事



建築まちづくり委員会
WG
湯浅 剛

私が代表を務める「一般社団法人えねこや」の活動を通して感じたことを、2月の建築まちづくり委員会と(一社)日本建築まちづくり適正支援機構の共催で行ったセミナー勉強会で、お話をさせていただきました。そのことを中心にご紹介させていただきます。

■えねこやの設立経緯と地域コミュニティ

えねこや(エネルギーの小屋)について、今年の『Bulletin』春号で紹介しました。私たちは、太陽光発電と蓄電池によって電力会社の電力をひかず、完全に電力自立した(=オフグリッド)小屋を半公共空間として地域に開き、災害に強いまちづくりと再生可能エネルギー普及を目指しています。

(一社)えねこやを立ち上げたきっかけは、福島第一原発事故でした。政治やエネルギーに無頓着だった私が、官邸前のデモに通うようになり、地元調布でも脱原発の署名活動を始めました。そこで年齢も職業もバラバラな仲間たちと知り合います。ただ脱原発の活動は長引き、メンバーは疲弊し、やがて何人かは離れていきました。それまで建築の話は一切していなかった私が「オフグリッド」について仲間へ投げかけたところ、再エネへのシフトを促す楽しく前向きな活動だね、と共感を得ました。そして、(一社)えねこやという法人にして活動を始めます。また団体立ち上げと同時に、私たちの事務所をオフグリッドにして、会員を募り、見学会を開催し、講演を引き受け、再エネや省エネに関心をもってもらうための活動も始めました。

(一社)えねこやを始めてからは「オフグリッド」がひとつのキーワードとなり、多くの方たちが興味を持ち、一挙に知り合いが増えました。エネルギー事業者、議員、役人、大学の先生、学生、マスコミなど多彩です。また市内でさまざまな活動に取り組むグループと繋がることのできたのは貴重でした。ミツバチの育成を通して環境を守る・空き家を活用したまちづくり・伐採された街路樹を生かす・森の保全や田んぼの再生・子どもたちの教育や育児のサポートなど、それまで見えていなかったコミュニティが近くにたくさんあることに気がつきました。

近隣のコミュニティと繋がる一方、意識の共有をベースとしたコミュニティは、SNSの力も加わり「キーワード」によって距離感なく広がるのも興味深いです。

■コミュニティ・アーキテクトとエネルギー

えねこや六曜舎の見学者には、オフグリッド、省エネ、再エネ、住宅等について説明をするのですが、多数の質問が出ることもしばしば。実は多くの市民が、住宅や建築に関して困っていることや聞きたいことがあるようです。建築や住宅、エネルギーを総合的にバランスよくアドバイスできる地域の専門家として、エネルギーコンサルを兼ねた「コミュニティ・アーキテクト」は、今後まちづくりという観点からも、重要な役割を担うのではないかと感じます。

■楽しみながら実践！

私たちはいま、エネルギーに関心を持たない人、そして子どもたちに働きかけを始めています。まず電力自立の小さな「えねこや屋台」をつくり、街に出てエネルギークイズで楽しく学ぶ活動を開始。



「えねこや屋台」の活動

そして次に、移動式えねこや(木製のトレーラーハウス)をワークショップでつくり、カフェやシアターなどに活用し、学校や駅前でエネルギー教室を開催するなど、楽しみながら学べる場の提供を目指しています。自分が一番楽しんでいる気もしますが…。

建築家というより、まず一個人として、同じ目線、同じ意識で活動を始めたことから、信頼関係を築くのはとてもスムーズでした。また仲間とともに「まず実践！」を優先することで、共感を持ってもらえることも多いのかもしれない。ぶれない信念と情熱を持って動いていれば、やがて手を差し伸べてくれる人が現れる、そんなことを頻繁に感じる今日この頃です。

まちづくりやCABEとは直接関係のない話となりましたが、何かのヒントになれば幸いです。

わたしの愛用ツール

建設現場やオフィスで、皆さんはどんなツールを使っていますか？

「わたしの愛用ツール」では、皆さんが普段仕事で使っている愛用品やマストアイテム、人に薦めたい便利なツールなどを紹介します。

今回は、自作のペン差しと、スコヤに替わる直角カット定規、そして初心を思い出させてくれる愛用品を紹介していただきました。



ネックストラップ型ペン差し

堂本隆司



自作したネックストラップ型ペン差し。クリップ付のペンであれば付け替え可能。

手が第二の脳だと教えられ、建築デザインをしてきた我々世代にとって、CADそしてBIMに移ろうとしている今でも、悩んだ時、一筋の回答が見えた時、さっとスケッチを描き確認したくなります。

そんな時手元にペンがないと、どこかにアイデアが飛んで行ってしまわないかと不安になります。ラフな服装で胸ポケットがなく、ペンを差しておく場所もないこともあります。

このペンを所持する方法はないかと数年の試行錯誤を経て出来上がったのが、ネックストラップ型ペン差しです。いろいろ製品を探しましたが、気に入ったものがないので自作しました。ネックストラップの先端部分を円形のカラビナに変え、革をカットし、2つ折りにしてハトメで穴を処理し、クリップ型のペンを差す。数本取付けも可能です。

今はファーバーカステルのねじ式の万年筆を首から吊り下げてあります。思いを込めくると回して取り出し、滑らかな筆感を楽しみながら描いています。

(堂本建築計画工房)

カミネコ (直角カット定規)

棚橋風太



模型製作で材料を垂直に切る時、一般的にスコヤを使うことが多い。しかし、小さな模型や添景など正確さが求められる際、私は「カミネコ」の直角カット定規を使用する。レモン画翠で購入できるのだが、手のひらサイズの6cm定規で値段は2,000円以上。なかなか高価な商品だが、模型をよく作る最近の学生も大体これを愛用している。

特徴は、薄いステンレス板が土台になっており、薄い紙もしっかり固定できること。また、アクリルの定規はメモリとともに背景の対象物の切りたい正確な位置が見える。さらに刃の逃げ穴があるので、最後まできれいに切ることができる。スコヤよりも軽量で、これを使うことで作業スピードと精度が格段に上がるし、使い慣れると、これがないと作業が歯がゆく感じてしまうほど。使い込みすぎてボロボロになってきているが、模型製作にはなくてはならない必需品である。

(古谷デザイン建築設計事務所)

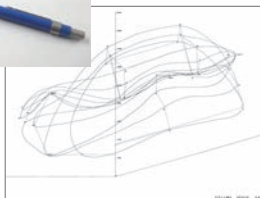
消しゴム

中山 薫



消しゴムとホルダー

学生時代の
手描きの図面



今では当たり前のようにある「CADの授業」が、選択授業として始まった時期に私は大学に入りました。当然、図面は製図板をフルに活用した「手描き」でした。その後、CADは建築の設計になくてはならないツールとなり、手描きの必須アイテム「消しゴム」が活躍する機会がめっきり減りました。

このちっとも減らない「消しゴム」は、大学時代からずっと私のそばから離れません。卒業してから仕事となった設計は、いろいろと付いてくるものが多く単純に楽しいことばかりではなくなっています。しかし、その存在はふと自分が「ピュアに設計を楽しんでいた」ことを思い出させてくれます。

学生時代を共に過ごし、今では「私の設計人生の生きざま」を傍で見てくれるこの「消しゴム」は大切な私の愛用ツールです。きっとこの「消しゴム」はこれからも私の設計人生と共に経過していくことでしょう。人生の終わりに、一緒に飲みながら思い出話をしたいものです。

(FISH + ARCHITECTS)

小さな生の営み

アトリエの窓の前に巣箱をかけている。

春になると、シジュウカラが出入りをしはじめる。しばらく前から目にする毎年の風景だ。

最初は何組かのつがいがいまわりを飛び交い、巣箱を点検に来る。先取りが勝ちなのか、好みで選ぶのかはわからない。前に巣立っていった若鳥たちかもしれない。

近くの枯れ草を集めての巣づくりから、やがてヒナが孵ると親鳥が小虫をくわえて忙しく行き来しはじめる。ヒナの成長にあわせてだろ、運ぶ虫の大きさもだんだんと大きくなり、出ていくときには白い糞を吐いている。小まめに掃除を怠らない。

5分おき、いや巣立ち前の頃になると2〜3分ぐらいだろうか、夜明けから夕暮れまでの時間で勘定すると、親鳥が運ぶ虫はたいへんな数だ。日に150匹は優に超えるだろうから、ひと月として4〜5,000匹になる。

やがては、さすがに親鳥に疲れが見え、羽の色艶も悪くなるような気がする。そのけなげさに気持ちが揺さられる。

巣立ちの頃は、今か今かと目が離せなくて、スタッフの皆仕事に手につかない。去年はふと目を向けたT君が「あつ！」と言って絶句した。見ると小蛇が顔を出している。急いで叩き出したけれど、もう遅かった。ヒナは皆飲まれてしまった。時にはそんな痛ましい事件にも出合う。



出入りする親鳥と巣立ち間際のヒナ。やわらかな巣。

巣立った後は中を掃除する。次の鳥たちのためだ。厚く重ねた枯草や苔、その上に近所の犬か猫の抜け毛が敷き込んである。触れるといかにもやわらかくて温かい。

毎春に見る小さな生の営み。巣づくり、子育て、そして時に起きる不幸。

ぼくらの住まいづくりにも重ねて、想いがめぐる風景だ。

(益子義弘)

〇〇を振り返る

編集後記

■平成最後の年に7本の生ハムを切りました。新記録です。でも広報では切ったことがない。新たな元号の時には、広報で生ハム大会しましょう。(中澤)

■こどもの卒業式。入学当初を振り返ると、成長に驚き、歳をとつても同じように成長したいなあと感じます。(清水)

■自分の高校時代から始まり、大学、就職、事務所独立と駆け抜けた平成。自分が生まれた昭和がまたちょっと遠くなる不思議な感覚です。(長澤)

■慌ただしい平成最後の年度末。来年度はしっかり振り返りができるような計画的な年にしたいですね。(吉田)

■1987年新日本建築家協会が設立され、丹下先生が初代会長にご就任。高島屋と立石は入りなさいと言われ、入会して今年で32年。六鹿会長まで12人の会長にお仕えし、旧事業委員会、現広報委員会、交流委員会をはじめ神奈川地域会、杉並地域会、都市デザイン部会他務めています。(立石)

退任のご挨拶

■JIAに入会し、気が付けば「編集委員」を拝命。初めての「編集」という仕事だったため、微力ながらもお役に立てたかどうか……。この度「卒業」となります。関係者の皆さま、本当にお世話になりました。(中山薫)

■子育てと同時スタートの広報委員。皆様のサポートのおかげで何とか乗り切った委員生活を、今期で卒業いたします。皆さま、ありがとうございました。(有泉絵美)

■関係の皆さま、本当にありがとうございました。(上原和彦)

新任のご挨拶

■この度、広報委員会に参加させていただくことになりました。まだ右も左も分かりませんが、会員への情報発信に尽力したいと思います。

(小林哲也)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会

委員長 : 市村宏文

副委員長 : 長澤 徹

委員 : 会田友朗・有泉絵美・小山将史・清水裕子・中澤克秀・
中山 薫・古谷俊一・吉田 満

編集長 : 長澤 徹

副編集長 : 小山将史

編集ワーキングメンバー : 有泉絵美・中山 薫・八田雅章・立石博巳・
会田友朗・上原和彦・古谷俊一・吉田 満

編集・制作 : 南風舎

Bulletin 279 2019 春号

発行日 : 平成31年4月15日

発行人 : 浅尾 悦子

発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館

Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294

印刷 : 株式会社 協進印刷

■JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧

・(公社) 日本建築家協会 (JIA) <http://www.jia.or.jp/>

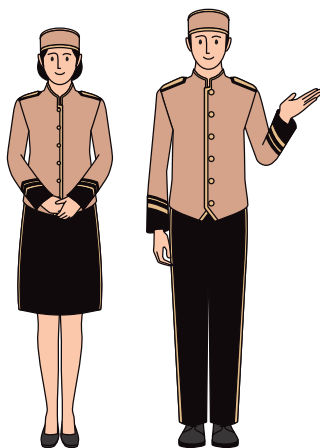
・JIA 関東甲信越支部 <http://www.jia-kanto.org/>

■定価 300円＋税/会員の購読料は会費に含まれています。

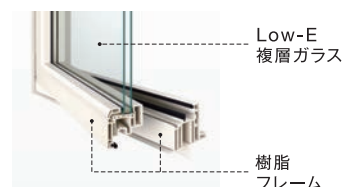
©公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2019

HOTEL MADO

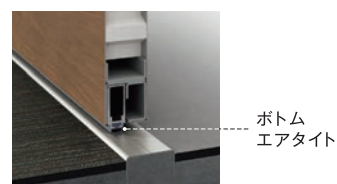
MADOとDOORで、上質なおもてなし



YKK APは、「窓」と「ドア」で
ホテルの上質なおもてなしをサポートします。
HOTEL MADOは、樹脂性のフレームや
Low-E複層ガラスの採用により最高グレードの
断熱性能で窓辺の結露や暑さ寒さをしっかり抑えます。
HOTEL DOORは、ボトムエアタイトの採用により、
高い遮音性を確保し、光も室内に漏らしません。
HOTEL MADOとHOTEL DOORが
客室に心地よい時間と空間をつくりだします。



HOTEL MADO



HOTEL DOOR

HOTEL DOOR